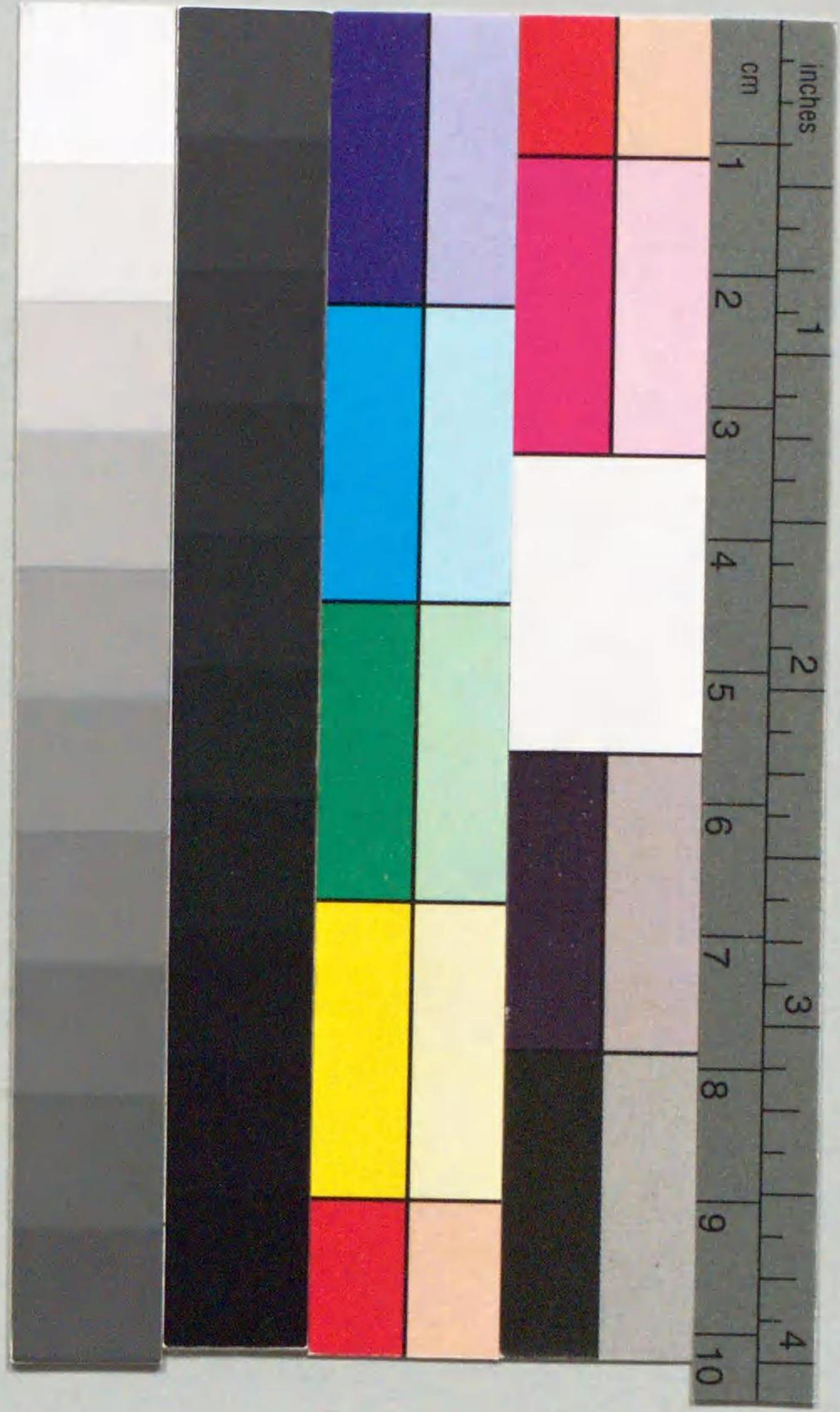


特21-84



1200500794300

特 21  
84





IT-2Y-85

46  
62  
102

家庭教育

幼年  
修身  
法

渡邊  
松茂著





第 84

捕陽 渡邊松茂著

教育之家庭教育

全書 幼年教育

大坂 積善館藏版



特21

84

攝陽

渡邊松茂著

教育  
家庭教育  
全書  
幼年教育

大坂

積善館藏版





◎ 玉の緒の歌

眠る心はしぬるなり  
 あはれをも知らぬ我命  
 なごゝあわれにいふは悪し  
 我命こそたのしかれ  
 人は塵にて又散ると  
 人の願ひは喜びか  
 人の願ひはこれならせ  
 今日よりまさる明日をまて  
 強き胸たも又たへせ

井上栞次郎譯

見ゆる形はをほろたり  
 あはれはかなき夢ぞか  
 我命こそまことなれ  
 墓はおはりの場所ならせ  
 いふはからたの上のと  
 人の願ひは悲みか  
 唯息らせ働きて  
 業は久しく時は馳せ  
 鼓の如く打ちつゞけ



一日く〜と近くある  
あらそひ多き世の中に  
かりてまは〜進むべし  
牽る、牛となる勿れ  
いかに空しく過去なるも  
我れを忘れぬ神をとり  
すぐれたる人世に多し  
勉めはけめば斯くならん  
長く残さん此名をば  
舟失ひて浪の間に

死出の旅をば速走るな  
此身をよせてさきがけに  
言なき豈とあるなかれ  
如何に未来は樂しきも  
とも之をば捨て置きて  
はたらくべきは今日ばかり  
我れとても人相同ト  
ゆめ怠らぬ務めなほ  
海より荒き世の中に  
獨り漂ふ我友は

我名を聞て勇まなん  
さすれば人は氣を張りて  
如何なる運もととせむ  
たのしみあるぞ働けよ

◎朝顔の花に寄せて學童を奨励す 小川健次郎

庭のかきねの朝顔よ  
咲こも盡ぬ其花の  
同ト天地の恵にて  
深き心を白露の  
人こそ花に劣るらん

我名を聞て進まなん  
事業ばかりに心して  
高さに至り馳せかけよ

朝な〜おまたらせ  
色といひ又形までも  
我等の目をば慰さむる  
予をも知ト寝て垂る  
學びの兒よ此花に



負<sup>まけ</sup>せ起<sup>おき</sup>出<sup>で</sup>て機<sup>き</sup>嫌<sup>けん</sup>能<sup>よく</sup>  
我<sup>わが</sup>身<sup>み</sup>の無<sup>む</sup>事<sup>じ</sup>を神<sup>かみ</sup>と謝<sup>しゃ</sup>  
襟<sup>えん</sup>や襖<sup>かすま</sup>の拭<sup>ふ</sup>きはらひ  
やがて汝<sup>なんじ</sup>の實<sup>か</sup>も花<sup>はな</sup>も  
庭<sup>には</sup>のかさねの朝<sup>あさ</sup>かほの  
咲<sup>さき</sup>たる花<sup>はな</sup>の其<sup>その</sup>色<sup>いろ</sup>に  
異<sup>こと</sup>なる原<sup>もと</sup>因<sup>きん</sup>や其<sup>その</sup>外<sup>ほか</sup>に  
心<sup>こゝろ</sup>理<sup>り</sup>の法<sup>ほう</sup>や白<sup>しろ</sup>露<sup>つゆ</sup>の  
人<sup>ひと</sup>こそ人<sup>ひと</sup>の甲<sup>かみ</sup>斐<sup>ひ</sup>かけれ  
疑<sup>うたが</sup>ふならば躊<sup>ちゆう</sup>躇<sup>ちゆう</sup>せむ

貌<sup>かほ</sup>打<sup>うち</sup>洗<sup>あら</sup>ひ父<sup>ちち</sup>母<sup>はは</sup>と  
庭<sup>には</sup>の面<sup>おもて</sup>のはき掃<sup>そう</sup>除<sup>じ</sup>  
怠<sup>おこた</sup>らぬやうつとめよや  
此<sup>この</sup>朝<sup>あさ</sup>顔<sup>かほ</sup>もまざるべし  
朝<sup>あさ</sup>なく<sup>く</sup>に咲<sup>さき</sup>理由<sup>わけ</sup>や  
白<sup>しろ</sup>といひ又<sup>また</sup>赤<sup>あか</sup>青<sup>あお</sup>と  
我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>の目<sup>め</sup>をば慰<sup>なぐさ</sup>さむる  
結<sup>むす</sup>ぶ作<sup>さ</sup>用<sup>よう</sup>をららで過<sup>す</sup>ぐ  
學<sup>まな</sup>びの兒<sup>こ</sup>よ此<sup>この</sup>問<sup>と</sup>を  
普<sup>ふ</sup>通<sup>つう</sup>の學<sup>がく</sup>を疾<sup>やく</sup>く畢<sup>を</sup>へて

精<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>論<sup>ろん</sup>や物<sup>ぶつ</sup>理<sup>り</sup>學<sup>がく</sup>  
化<sup>くわ</sup>醇<sup>じゆん</sup>の律<sup>りつ</sup>をあさらめて  
幾<sup>いく</sup>春<sup>はる</sup>秋<sup>あき</sup>の年<sup>とし</sup>月<sup>つき</sup>を  
今<sup>いま</sup>を昔<sup>つひか</sup>の汝<sup>なんじ</sup>の身<sup>み</sup>  
勤<sup>つと</sup>めて徒<sup>むだ</sup>と過<sup>す</sup>さるなよ  
昔<sup>つひか</sup>も似<sup>に</sup>たる學<sup>まな</sup>の兒<sup>こ</sup>  
◎ロングフェロー氏の歌  
そも靈<sup>れい</sup>魂<sup>こん</sup>の眠<sup>ねむ</sup>るのは  
人<sup>ひと</sup>の一<sup>いっ</sup>生<sup>せい</sup>夢<sup>ゆめ</sup>かりと  
眠<sup>ねむ</sup>らよや夢<sup>ゆめ</sup>は見<sup>み</sup>ぬ者<sup>もの</sup>ぞ

夫<sup>それ</sup>から夫<sup>それ</sup>と研<sup>けん</sup>究<sup>きゆう</sup>し  
學<sup>がく</sup>士<sup>し</sup>哲<sup>てつ</sup>士<sup>し</sup>と呼<sup>よ</sup>ばれたら  
樂<sup>たの</sup>しき中<sup>なか</sup>に送<sup>おく</sup>る可<sup>べ</sup>し  
露<sup>つゆ</sup>の散<sup>ちる</sup>る間<sup>ま</sup>も怠<sup>おこ</sup>らぬ  
花<sup>はな</sup>もよく似<sup>に</sup>たる昔<sup>つひか</sup>の兒<sup>こ</sup>  
山<sup>やま</sup>仙<sup>せん</sup>士<sup>し</sup>  
死<sup>い</sup>ぬと云<sup>い</sup>ふべき者<sup>もの</sup>ぞか  
哀<sup>あは</sup>れかふして歌<sup>うた</sup>ふなよ  
此<sup>この</sup>世<sup>よ</sup>の事<sup>こと</sup>を何<sup>なに</sup>事<sup>こと</sup>も



夢と思へど左もあらせ  
最と慥なる事ぞかし  
墓も埋まるものならせ  
歸ると云ふは肉體ぞ  
此世も在りて樂むも  
世も有趣意も有ざらん  
日毎くも怠らせ  
功を立ねば降ぬぞよ  
藝道最とも易らせ  
墓無く進む葬禮の

人の一生夢ならせ  
人の終は墓なくも  
土より来り又土も  
そりや靈魂の事ならせ  
又苦しむも國と人の  
生るは役も立つ爲ぞ  
今日を今日丈一日の  
光陰實に箭の如く  
心は如何も猛く共  
送葬太鼓打つ胸は

音止めされたる太鼓の音  
此世の中は戦争ぞ  
人も生れた甲斐もなく  
河ゆむ羊や牛たるな  
功名手柄な此べきぞ  
未来はあてふ此可らせ  
過去は昔も過し事  
其働を見る者は  
豪傑輩の一生を  
生きて甲斐なき者成ぞ

最とも衰れも響くらん、  
其戦争の中も居て  
人も使はれ追はれつゝ  
人も劣らせ憤發し  
如何も樂しく思ふとも  
如何も嬉しき有つるも  
働くべきは現在ぞ  
胸の心と天神  
熟ら思ひ免ぐらせは  
人も勝れし手柄して



家庭 幼年 修身 ばあゝ 目録

● 第十一 譚	● 第十 譚	● 第九 譚	● 第八 譚	● 第七 譚	● 第六 譚	● 第五 譚	● 第四 譚	● 第三 譚	● 第二 譚	● 第一 譚
衆鼠の議事	獅子と海豚	鳥と獸と融蝠	病氣の鳶	鷺と鴉	病氣の獅子	狼と馬	童兒と榛實	鴉と白鳥	一頭の獅子と三頭の牛	亞刺比亞人と駱駝
一〇	八	八	七	六	四	三	三	二	一	一

稀なる譽得るからば  
 永く傳へて残るらん  
 社會の海に乗り出して  
 吹廻はされて破船して  
 氣を取り直して憤發し  
 されば人々怠たるな  
 運命如何にたかきも  
 撓まざ止まざ自若とし  
 勤め働くとをせよ

名は香しく後の世に  
 其香しき名を聞かば  
 艱難辛苦の浪風も  
 助け船さへあらぬ身を  
 功名遂ぐる者あらん  
 暫時も猶豫するなかれ  
 心を落すと成るれ  
 功名手柄なるとも



●第十二譚	水星明神と労働者……………一一
●第十三譚	笛を吹く漁夫……………一二
●第十四譚	二人の兵士と盗賊……………一三
●第十五譚	老婆と醫師……………一四
●第十六譚	無尾狐……………一六
●第十七譚	鳩と鴉……………一八
●第十八譚	鷗と鳶……………一八
●第十九譚	射術家と獅子……………一八
●第二十譚	蟻と蝨……………一九
●第二十一譚	狐と獅子……………二〇
●第二十二譚	馬と圍夫……………二一
●第二十三譚	蜂と山鳥と農夫……………二二
●第二十四譚	闘鶏と鷺……………二三

●第二十五譚	羊飼と家犬……………二三
●第二十六譚	農夫と蛇……………二四
●第二十七譚	北風と日輪……………二五
●第二十八譚	釣人と小魚……………二五
●第二十九譚	福神と大工……………二六
●第三十譚	山羊と野葡萄……………二八
●第三十一譚	犬に噛れた人……………二九
●第三十二譚	猿と駱駝……………二九
●第三十三譚	好事な小兒……………三〇
●第三十四譚	烏と鴿……………三一
●第三十五譚	老牛と小牛……………三三
●第三十六譚	老爺と二人の娘……………三三
●第三十七譚	三人の商賈……………三五



●第三十八譚 賣ト者……………三五

●第三十九譚 羊の皮を着た狼……………三六

●第四十譚 野牛と山羊……………三七

●第四十一譚 絶壁の山羊と平地の狼……………三七

●第四十二譚 老衰の獅子……………三八

●第四十三譚 海岸の旅人……………三九

●第四十四譚 羊肉を食ふ牧羊者……………四〇

●第四十五譚 犬と生皮……………四〇

●第四十六譚 游泳をする少年……………四一

●第四十七譚 家主と家犬……………四二

●第四十八譚 野猪と狐……………四二

●第四十九譚 獲物を獅子に奪られた狼……………四三

●第五十譚 狼と羊の番犬……………四四

●第五十一譚 馬と騎馬武者……………四五

●第五十二譚 鴉と水星権現……………四六

●第五十三譚 二頭の騾と盗賊……………四七

●第五十四譚 鴉と羊……………四八

●第五十五譚 美男兒と醜女兒……………四九

●第五十六譚 鼯鼠の母と子……………五〇

●第五十七譚 駱駝と歳神……………五一

●第五十八譚 老衰の獵犬……………五二

●第五十九譚 山羊仔と狼……………五三

●第六十譚 旅から歸つた人の高慢……………五三

●第六十一譚 鹿と野葡萄……………五四

●第六十二譚 天帝と蜜蜂……………五五

●第六十三譚 犬と秣槽……………五六



●第六十四譚 鶴と雁……………五六

●第六十五譚 猿と海豚……………五七

●第六十六譚 牝獅子……………五八

●第六十七譚 蛙と鼠と鳶……………五九

●第六十八譚 鹿兒と其母……………六〇

●第六十九譚 鷺と狐……………六一

●第七十譚 小兒と蟲と蠅……………六二

●第七十一譚 狐と山羊……………六二

●七十二譚 蜂と蛇……………六四

●七十三譚 乳母と狼……………六五

●七十四譚 二人の旅行者と斧……………六六

●七十五譚 老人と死神……………六七

●七十六譚 水を飲みたがる鳩……………六八

●第七十七譚 福神を賣る人……………六八

●第七十八譚 鼠と鮒の戦争……………六九

●第七十九譚 獅子王の管轄……………七〇

●第八十譚 太子と畫獅子……………七一

●第八十一譚 母猿と子猿……………七二

●第八十二譚 生擒に遭ふた鷺……………七三

●第八十三譚 農夫と狐……………七三

●第八十四譚 獵夫と樵夫……………七四

●第八十五譚 橄欖樹と無花果樹……………七五

●第八十六譚 二個の過失囊……………七六

●第八十七譚 蝮蛇と鏝……………七六

●第八十八譚 金満家と柔皮商……………七七

●第八十九譚 犬と兎……………七七



◎第九十譚	野牛と女獅子と猪獵夫	七八
◎第九十一譚	駱駝	七八
◎第九十二譚	猫と鶏	七九
◎第九十三譚	蟹と狐	八〇
◎第九十四譚	二正の蛙	八一
◎第九十五譚	牧羊者と狼	八一
◎第九十六譚	腹と支幹	八二
◎第九十七譚	鴉と蛇	八三
◎第九十八譚	猫と愛神	八四
◎第九十九譚	鷹と鳶と鳩	八五
◎第一百譚	牝鷄と燕子	八六
◎第一百一譚	盜賊と鶏	八六
◎第一百二譚	乘馬と驢馬	八七

◎第一百三譚	旅人と運命の女神	八八
◎第一百四譚	二正の蛙の移住	八九
◎第一百五譚	鹿と羊と狼	九〇
◎第一百六譚	猫と鳥	九〇
◎第一百七譚	雀と兎	九一
◎第一百八譚	敵同士の人	九二
◎第一百九譚	食牛と屠丁	九三
◎第一百十譚	暴犬	九三
◎第一百十一譚	旅人と犬	九四
◎第一百十二譚	牝鹿と獅子	九五
◎第一百十三譚	驢馬と牧者	九六
◎第一百十四譚	禿頭翁と蠅	九六
◎第一百十五譚	醫師に化れた補鞋匠	九七



◎ 第一百十六譚	獵師 <small>りやうし</small> と騎馬 <small>きば</small> 武者 <small>むしや</small> ..... 九九
◎ 第一百十七譚	犬 <small>いぬ</small> と獅子 <small>しし</small> の皮 <small>かわ</small> と狐 <small>きつね</small> ..... 九九
◎ 第一百十八譚	驢馬 <small>ろば</small> と狼 <small>おほあみ</small> ..... 一〇〇
◎ 第一百十九譚	蚊 <small>あひ</small> と獅子 <small>しし</small> ..... 一〇一
◎ 第一百二十譚	牝山 <small>めや</small> 羊 <small>やぎ</small> と狼 <small>おほあみ</small> ..... 一〇二
◎ 第一百二十一譚	牧牛者 <small>うしかひ</small> と牛仔 <small>こうち</small> ..... 一〇三
◎ 第一百二十二譚	兎 <small>うさぎ</small> と獅子 <small>しし</small> ..... 一〇四
◎ 第一百二十三譚	驢馬 <small>ろば</small> と騾 <small>ろ</small> ..... 一〇四
◎ 第一百二十四譚	驢馬 <small>ろば</small> と買人 <small>かひて</small> ..... 一〇五
◎ 第一百二十五譚	鴉 <small>からす</small> と狐 <small>きつね</small> ..... 一〇六
◎ 第一百二十六譚	驢馬 <small>ろば</small> と戰馬 <small>せんば</small> ..... 一〇七
◎ 第一百二十七譚	鵝柴 <small>はこひけ</small> 奴 <small>め</small> と山鳥 <small>やまどり</small> と鷄 <small>にはどり</small> ..... 一〇八
◎ 第一百二十八譚	乘馬 <small>まゆめ</small> と磨舍業 <small>こなや</small> ..... 一一〇

◎ 第一百二十九譚	醫師 <small>いしや</small> になつた蝦蟇 <small>ひきかへる</small> ..... 一一一
◎ 第一百三十譚	猫 <small>ねこ</small> と鷺 <small>わし</small> と女猪子 <small>めしし</small> ..... 一一二
◎ 第一百三十一譚	蚊 <small>あひ</small> と牛 <small>うし</small> ..... 一一四
◎ 第一百三十二譚	海豚 <small>いるか</small> と鯨 <small>くじら</small> と鰻魚 <small>いわし</small> ..... 一一五
◎ 第一百三十三譚	驢馬 <small>ろば</small> と蛙 <small>かへる</small> ..... 一一五
◎ 第一百三十四譚	捕鳥奴 <small>とりさし</small> と蝮蛇 <small>まひし</small> ..... 一一六
◎ 第一百三十五譚	黒奴 <small>くろんぼろ</small> ..... 一一七
◎ 第一百三十六譚	鳶 <small>とみ</small> と鴿 <small>はくとら</small> ..... 一一七
◎ 第一百三十七譚	狼 <small>おほあみ</small> と獅子 <small>しし</small> ..... 一一八
◎ 第一百三十八譚	膨脹 <small>ふくれ</small> た狐 <small>きつね</small> ..... 一一八
◎ 第一百三十九譚	鴿 <small>はくとら</small> と鷺 <small>わし</small> ..... 一一九
◎ 第一百四十譚	梟 <small>かぐろ</small> と蟲 <small>きりくす</small> ..... 一二〇
◎ 第一百四十一譚	兎殺 <small>うところし</small> 人..... 一二一



◎ 第四百二十二譚	農夫と獅子	一二二
◎ 第四百二十三譚	太陽を訴へる蛙	一二三
◎ 第四百四十四譚	人と獅子の争	一二四
◎ 第四百四十五譚	神佛の議論	一二四
◎ 第四百四十六譚	農夫と鶴	一二六
◎ 第四百四十七譚	赤禿頭の武士	一二六
◎ 第四百四十八譚	狼と羊仔	一二七
◎ 第四百四十九譚	狼と家犬	一二九
◎ 第四百五十譚	負傷の狼	一二九
◎ 第四百五十一譚	獅子に使役れる狐	一三〇
◎ 第四百五十二譚	獅子と牡猪子	一三一

家庭 幼年修身ばあゝ目録終

家庭 幼年修身ばあゝ

黃薇 渡邊松茂 著

◎ 第一 譚 亞刺比亞人と駱駝

或る亞刺比亞人が自分の飼て居る駱駝に貨物を載けてサア是から出  
 立と云ふ所で「汝は山路を登て行くのが宜いか又は下りて行くのが  
 宜いか如何方ダ」と尋ねますと駱駝は何の考へもなく「旦那、廣い平  
 地を通て行く平常の路は塞がりまゝたか  
 世の中を渡るにも平坦な道が何より宜い

◎ 第二 譚 一頭の獅子と三頭の牛

或る野原に三頭の野牛が睦しく暮して居ますと其近邊の山に住居て  
 居る獅子が此野牛を餌食にたまいと常々思て居まゝたが何分にも三  
 頭一處に居ては己にも奪憎いと夫より思ひまゝして夫より三頭の中の



割るやういろくく水をさします三頭の間あひだに紛議まつれが起り終つひに別れく  
 になりました獅子ししは此所こゝぞと餌壺ゑづばに入り其牛そのうしを一ツくひとに奪殺とりころト  
 ウく三頭さんびきとも己おのれが餌物ゑものにして日頃ひごろの望のぞみを果はたました  
 敵てきの離間なみだひを謀はかるは軍機いくさの秘密ひみつでございます

◎ 第三 譚

鴉と白鳥

或ある鴉からすが白鳥はくてうの羽根はねの眞白まっしろなのを見て日頃ひごろ羨うらやんで居ゐましたが彼あれは  
 何なんでも水中みづのなかに住すんで居ゐて毎日まいにちく羽根はねの洗濯せんたくをするから如あんな彼な奇麗きれい  
 にかるのだと早合点はやあてんを致いたしまして自分おのれが常つねに住すんで居ゐる近處あたりには神社やしろ  
 があつて供物くものが澤山たくさんで自分共おんどもの餌ゑに自由じゆうなのを見限みきりて池いけや河がわなどの  
 水みづのある所ところに往ゆき毎日まいにちく浴水ぎやうすいをして羽根はねの手入ていれをまましたが奇麗きれい  
 になつたもの、益々ますます黒くろくなるばかりで白しろくはあありませせん其その上うへ食馴くいな  
 れた食物しよくもののないのでやがて飢死うへしにを致いたました

第一 譚



第二 譚



第五 譚



第七 譚



第十六 譚



第十七 譚





上帝あてがはの賦與あてがはれた性質せいしつを易やすへやうと思おもふのは無理むりなことで御座ござま  
す

◎ 第四 譚 童子と榛實

或ある童兒どうじが榛實はしほのみの入れいてある壺つぼのうちへ手てを突込つぎこみ握にぎれる丈たけ握にぎつて  
是これで宜よくと手てを抜ぬくと志こころますと壺つぼの口くちが狭せまいので手てがぬけません  
何卒どうぞ握にぎつた實みへすこしも減へすまい手てへ抜ぬたいとあせりまゝたが爾しかう  
旨うまくへ往ゆませんソコデ大聲おほこゑをあけて叫喚なげ出だしますと側そばに立たつて見みて居あた  
人ひとが懇ろねんじに慰なぐさめて「ア、好童兒いこうじダ」半分はんぶん握にぎみなさい、さうすれば手て  
も抜ぬけ實みも取とれます

僅々わずかづゝでも幾度いくども取とれば夥多たぐひんになると云いふことを知しらねばな  
りません

◎ 第五 譚 狼と馬



或る狼が麥畑から出かけると平生懇意に居る馬に邂逅まゝして「イヤ是れは馬ちやん好い處でお目に掛つた今私は好い麥を見付たがお前に食へせたいと思つて少も口を付けずに來た早く往て喰なさい私はお前がボリ〜と食らかすのを聞て居るのが極好だと云ひますと馬の冷かな句調で「夫れは近頃御親切な譯で難有い、志か〜汝の食物が平生麥だつたら私の喰ふ音を聞たいとて楞い腹を堪忍へて居なさる道理もあるまい

己れが欲せざる所人に施す勿れと云ふ教にありますが此説話ばそれと反對でございます

◎第六譚 病氣の獅子

或る獅子老年となり餌食を奪ることが出來なくなりまゝたので何たか方便を設け寝て居て餌食を奪る工夫を志なければならぬと考へ病氣

と披露して毎日洞穴の中に寝て居まゝた此事が世間へ聞えますと種の獸類は「サテハ我等ハモウ安心と云ふものダ志か〜病氣とあれば一度は見舞に行かすばなるまい」と追々洞穴へ見舞ひに出掛ますと獅子は臥て居ながら計畧が中つたと窺かに喜び見舞に來た獸の隙を見すま〜攫み奪てハ餌食に致しまゝたスルト狐ハ何でも怪しいと思ひ實否を探らんと或日獅子の洞穴へ見舞に來て獅子王に近寄るは不敬だと云ふ様子で入口に居て挨拶をしますと獅子は「イヤ誰れかと思つたら狐さんかサア、ズット此方へお寄なさい私は病氣で足も腰も立ちませんから御迎ひにも出ませんサテ此方へお寄あさいチト若い時の話でもいたしませう」と懇ろに云ひますと「狐はイヤモウれ構ひ下さるナ先づ〜れ大事になされませと暇を告げて立歸りながら「御看病もいたさず早々引退ります私を無禮な奴だと思ひ下さ



るナ私は端居で挨拶うこく歸りますは別儀でも御座いません私の前に御尋ね申した者どもの足跡は皆な大王の方へばかり向て居まゝて洞外へ出た足跡は一向見ゆせん是に仔細のある事かと思ひツイ遠慮をいたしませんでした

他人の不幸を察して自ら戒むるものは能く解理た人で、ござい  
ます

◎ 第七 譚 鷺と鴉

或時鷺が餌食を取らんと峻岨な高い岩の上から下の野原を一飛に舞ひ下り羊仔を攫つて飛び去りまゝた其時一羽の鴉が傍に居て鷺の伎倆を觀て羨ましく思ひ何んの吾だつて彼の位のことば出來だらうと直に牡羊の上に飛下り、あらん限の勢力を出してムツと攫んで飛上らうとする中々自由になりません、ろこで打棄て、置いて自分獨り

で飛去らうとする羊の毛が爪に引かゝつて飛ぶ事が出來ません頻りに羽敲をして困却て居ますと羊飼がこれを見つけ早々其處へ出て來て鴉を捕押へ其羽根を剪つて小童に與りまゝた小童はこれを見て「阿爺此鳥は何んだ」と尋ねますと「吾儂は鴉と思つて居るが汝が若し鴉に聞いたら私は鷺でございまして、いふかも知れぬ

◎ 第八 譚 病氣の鳶

永く病氣で臥てる鳶の枕頭に母鳶が介抱して居ますと「阿母さん其様鬱々思はないで直に神様へ參詣して私の病氣が全快る様に祈願をかけてお呉れさうすると速く快りますから」と言へば母鳶「嗚呼お前は何の神様へお祈願申たらお情を掛けて下さるとお思いがた前が平常御供物を荒さない神様がありますか

艱難の時に扶助を得たいと思ふものへ幸福の時に友人を求めて



おかねばなりません

◎ 第九 譚

鳥と獸と蝙蝠

或日鳥と獸との間に軍が起り暫時は勝敗のほども分りませんとて  
 が此時蝙蝠の鳥とも獸とも屬かぬ形容ゆゑ其譯を言立て彼軍此軍へ  
 も屬かず旗色を見て獸の方が勝色になると其方へ加はり鳥の方が勝  
 色になると鳥方になり何時も好い顔をして居りますと其中に戦争も  
 和睦になり双方の鳥獸が寄集まりました時孰れも蝙蝠の二心を惡み  
 双方ともに仲間に入れず以後決して白晝に飛廻り又た奇麗な所に  
 住むべからずと申渡され其後の軒の片隅や汚穢い洞穴に潜み黄昏に  
 飛廻はるばかりで肩身せまく世を渡ることになりました  
 人も二心あるものは其末期は哀れな身分になります

◎ 第十 譚

獅子と海豚

或る獅子がたま〜海岸を徘徊して居ますと海豚が波の間から頭を擧  
 げたのを見て「何んと貴君と私と同盟をして相互に助け合ふではひ  
 さいませんか吾の獸の王で足下は魚の王だ實に好朋友だ相應た盟友  
 だ」と云ひますと海豚は成程左様だと思つて直に同意して獅子と同  
 盟しました其後獅子と野牛とが戦争を始めますと獅子は海豚に使を  
 遣り同盟の譯ゆゑ援兵を頼むとの事に海豚は早速承諾はしたものの、  
 如何しても上陸することが出来ないの愚圖〜志て居りますと獅子  
 は大きに憤怒を發て「我を騙したぞ」と罵詈雑言を言ひますと海豚は「ろんな  
 に我を惡くお云ひなされるナ元來我の性質は海中でハ強勢なものだが  
 陸に上ては些少も役に立ないのサ

友朋を撰ぶるに先づ其性質を見定めねば非常の時に益にたゝな  
 いばかりか或は害になることがあります



● 第十一譚

衆鼠の議事

諸の鼠が猫の爲めに害に遭ふものゝ多いのを憂ひ好き防禦法を相談せんとして或夜會同を開けましたが是れぞと思ふ好い方法もありません是非なく會議を開やうとする時一疋の小鼠が末座より進み出て「我の考へでは猫に奪らるゝのハ畢竟私共の油斷から起るのです此の後ハ猫の項領に鈴を着けて置き鈴の音が聞へたら影を隠すといふ譯に志たら宜からうと思ひます」と述ましたソコデ皆々感服して以後此策畧を用ひやうといふ事に議事が極りましたスルト是迄黙然て居た老鼠が咳一咳をして坐中をきつと見まわし「今の策畧は如何にも名案妙考で其効能も大したものには相違ないが茲に私の聞て置たいことがある一体何某殿が猫の領に鈴を着けに參らるゝや理論と實際とは違ふことが間々あります

● 第十二譚

水神明神と労働者

或る労働者が河の畔りで樹を伐て居ますと如何した機會かツイ斧を水中へ取落し忽ち生業の資本を失くした貧乏人の事故大層嘆ひて居りますと此處へ水神明神が忽然とあらはれ労働者より仔細を聞召しやがて水中に沈み給ひ暫時すると黄金の斧を持出給ひ「汝の斧ハ是なりやと問ひ給へば労働者はよくよくこれを見て「否是れは私のでございません」と答へました明神再び水中に入り今度は銀の斧を持出給ひ「是れこそ汝の斧なるべし」と示し給ふと労働者は是を見て「否是れも私ものではございません」と答へました水神又々水中に入り更に鐵の斧を持出給ひ「是れなるか」と問給ふと労働者は雀躍して「是れこそ私の斧に違ひ御座りませんアラ難有や嬉や」と三拜九拜して喜びますと水神は其正直を賞め給ひ「人は斯くあつてこそ幸福



を受くるなれ」と鐵の斧に金銀の斧をも取添へて下されまゝたサテ  
 此働勞者は夕方になると居村へ歸り今日の始末を同業のものに話  
 ますと或る慾の深い老翁が翌朝早々右の河邊へ行き樹を伐るやうな  
 風体をして斧を水中へ投げ込み河原へ打伏し宛も哀しげに泣て居ま  
 すと水星明神があらわれ給ひ事の始末を聞き取り水中に入り給ひ暫時  
 すると黄金の斧を持出給ひ「汝の斧は是れなるや」と問給ふと老翁は  
 周障手を延ばし「是れが私の失ひまゝた斧でございませう」と云ひ殆に  
 握取らうと志ますと明神大に怒り給ひ其邪曲を惡みて黄金の斧のみ  
 か前に失ひし鐵の斧をも與へ給はざりしと  
 正直は金銀を造る資本でございませう

第十三譚 笛を吹く漁夫

或る漁夫が乃公の笛の名人だと自慢をして居まゝたが一日笛と網を

もつて海邊に行き網へ近邊へ廣げてをき上手に笛を吹けば魚は其調  
 子に乗つて濱へ躍上るだらうと宛も面白さうに笛を吹て居まゝたが  
 一時間を過ても二時間を過ぎてても一尾の魚も躍上りませんうこで漁  
 夫は是で不可ぬと笛を投捨て網を打下ますと數多の魚が漁れて  
 頻りに躍跳ますゆゑ漁夫は笑ひながら「エー己が笛を吹ても汝輩は  
 少くも躍らないで止めて居ると躍跳出すと不埒な奴等だ  
 人を見て法を説かねば少くも感動のないものでございませう

第十四譚 二人の兵士と盜賊

二人の兵士が連立て或所へ旅行をなす山中へ差かゝりますと盜賊に  
 出遇ひ一人の兵士は卑怯にも逸散に逃出まゝたので是非なく跡の  
 一人は刀を抜て渡り合ひ漸くこれを斬伏せまゝた其時逃出まゝた一人  
 の兵士の遙か遠方より賊の斬られたのを見て勢ひ鋭く引還し旅被を脱



棄て刀を引き抜き振りかへし「拙者が賊を引受たり拙者の手練を見  
せて呉れん」と大音聲に呼立ますと賊と戦つた一人の兵士は回顧  
て「假令ひ今の聲ばかりでも戦つて居るとき出て呉れ、は何のくら  
お加勢になつたか知れない、まか、モウ事が終んだから刀は鞘に納め  
たまへ又た足下の心底を知らぬ人を欺すまで先づ、黙止て居  
るが宜いヨ僕は今足下が如何程の速度を以て逃げらるゝかを發見  
した僕は足下の勇氣にはどんな事でも依頼の出来ないことを知りま  
す

危難に遇へば友人の心底は直に解ります

◎第十五譚 老婆と醫師

或る老婆が永らく眼病を煩ひ遂に眼が見へなくなりましたから或る  
醫師を招いて証人をも立て「若く私の眼病が全快ましたら金銭何程

を進呈ませう又た先生の御治療が驗効しませんで全快させなしたら少  
くも御禮に致しませぬ」と約束を致しましたそこで醫師も承知のう  
へ治療に取かゝつた偽をして折々見舞に往き其都度老婆の所持品を  
少づづ、持出し是れでよと思案して夫から眞實の療治を施し、ま  
すと直に眼が見ゆる様にありましたサア約束の通り謝禮が受けた  
と云ひますと老婆は「成程先生の御庇蔭で眼が見ゆる様にはなりま  
したか私の所持品は悉皆何處へか失せて仕舞ましたゆゑ餘儀かくお  
謝禮が出来ません」との答へに醫師は承知せず何でも蚊でも拂がして  
もらいたいと度々催促をしても老婆は一向受け付けません唯だ苦情は  
かり言て時日を送つて居ますと醫師は最早勘辨が出来ないとて、と  
うく、裁判所へ藥代請求の訴訟を起しましたので老婆は法廷に出で  
「成程原告の申立の通り私の眼が見ゆる様になりさへすれば如何程



の御謝禮でもいたします若く此まゝになれば少くも御謝禮はいたさぬと約束をいたしおいたが私は原告の言ひます通り私の眼が全快たとは思ひません何故なれば最初私が煩ひ付て彼先生の御見舞を頼みまゝした時には未だ私の家内の諸道具や品々へ眼に見えて居ましたか今では其諸道具や品々は少くも私の眼に見えなくなりました是れでも薬禮は拂はなければなりませんか

◎第十六譚 無尾狐

或る狐が一度罅に罹つて尾を狹まれ逃げやうと思つても逃げられませんから命には替へられぬと思案を極めて尾を引切て遁げましたソコデ此無尾狐が熟々と考へますに「ア、吾は生れもつかぬ不具者になつて仲間の前も耻かゝい寧ろ死んで仕舞はうかイヤ〜死んで物は食ふことも面白ひことも歩行事も出来ない夫よりか爰に好思

案がある、何んでも他の諸狐にも尾を切らせて世間に尾のある狐は不具だと言はせる様にすれば吾が耻にいらぬ悔んで死ぬほどのことない」と考へまして急に狐會議を開き「皆さん何んでも我の眞似をして尾を切て仕舞なさい私が如斯に身軽く運動することに御氣が付かれませんか私の尾のあるうちは斯まで便利だとは思ひませんでしたか今では何故早く尾を切なかつたかと後悔するほど便利でス、そして考へて見ますと尾といふものゝ重いばかりか穢い長物なものでス御同類の貴狐方にも此事をお聞かせ申したいと思ひまして故々今日集會を願た譯でス」と辨に任せて饒舌てますと古狐が一疋進み出で「無尾君の御親切は如何にも難有譯ですが若く貴公が尾を失さななら其様に我々に尾を切るが宜いなど、御勧めなさりもなさるまい人も身勝手なことを言ひますから中々油断はなりません



◎第十七譚

鳩と鴉

或鳩が籠の中に飼はれて居て「吾れには數多の眷族があるんだ」と高言を吐て居ますと當時其屋根の上に鴉が来て「なんと汝は馬鹿なことを自慢して居るモウ止セ」汝は眷族が數多あれば數多あるほど猶更籠の鳥だと云ふことを餘計に歎かなければならぬのダ

◎第十八譚

鷗と鳶

或る鷗が大きな魚を攫んで一呑に吞やうとして咽へ引掛け苦しい所から濱邊へ倒れてグウグウ言て居ますと其上を飛廻つて居る鳶が一言の慰諭を申さうかと少く舞下りまゝして「其れは丁度汝に相當して居るぞ空中の鳥が海中より食物を求めるとは不得心の事だ己れの分限を守らないと苦しみは多いものでございます

◎第十九譚

射術家と獅子

第十九譚



第二十一譚



第二十二譚



第二百二十四譚



第二十七譚



第二十八譚





或る射術家が山奥へ獵に行き此處其處と獸を尋ねて駈廻つて居ます  
 と獸はソラ射術の先生が來たぞと一目散に逃げましたが獅子は「ナ  
 ニ弓術の先生位は怖はくない」と齒をむき出して威張て居ました  
 先生が其處へ出て來て「待て汝に示すべき一事あり我使者を差向け  
 る」と手早く弓に矢をつがへ切て放しますと其矢が獅子の洞腹を貫  
 通りました、そこで獅子は吼苦みながら崖の中へ逃込もうとするを  
 傍に隠れて見て居た狐が「物真似をして威勢をつけて敵に反撃へと  
 勧めますと獅子が頭を掉て「狐サン汝モウ勸めて下さるな彼人の使  
 者でさへ如斯強ひものを、本人の力量は如何位か知れるものか  
 強きを恃み恐るべきを恐れざれば不覺の禍あり

◎第二十二譚

蟻と鳥螽

數多の蟻共が冬の日暖かな天氣に夏の日に取收た食物を乾かして居



ますと飢つかれた鳥蟲がしながら其處へ出て来て「何卒お助けに少  
 くなりとも其餌食をお分け下され私は此節何も食はずにゐます」と  
 歎きますと一定の老年蟻が「如何さま御邊は鳥蟲であつたナ此夏中  
 何をして暮らされた」と尋ます鳥蟲はイヤ別段愉快なこともありま  
 せんでしたたが歌を謡て暮らした」と答へますと數多の蟻共が其言  
 詞を聞いて嘲笑ひ「イヤ其れでは何も合力するは無益ナ事ダ我々は夏  
 の炎天に照らされながらポツ／＼餌を拾ひ集めて此冬枯の用意を  
 たんだ其ダから今日にかつても飢へるやうなことはない、長の夏中  
 歌など謡て面白く暮らしたものは冬にあると食物を探索して踊りまわ  
 らねばならぬ

労働は安樂の基本でございます

第二十一譚 狐と獅子

或る狐が未だ獅子は如何なものだか見た事がありませんでしたたが途  
 中で初めて邂逅した時の恐怖して死ぬやうに思ひました其後又た邂  
 逅した時は度胸がすはッて如何なものに恐るゝものかと言ふ心にな  
 りました其後又々邂逅した時はズツト大胆になり傍へ近寄て「イヤ  
 大王如何でげすな杯と言詞を掛ける様になりました  
 餘り懇意になりますとツイ悔る心が起るものですよ／＼注意  
 しなければなりません

第二十二譚 馬と圀夫

或圀夫が飼馬の豆秣を盗んで賣代なく主人に怪まれてはならぬと終  
 日其飼馬の毛を梳り立たり浴水をさしたりして美しく見せんと働い  
 て居ますと馬が「足下、私を美しく見せやうと、お思ひならマア其梳た  
 り浴たりするのハ大抵にして置いて食物を充分下さいませ」



枝葉を茂らせやうと思へば能く其根本を養はねばかりません

●第二十三譚 蜂と山鳥と農夫

蜂と山鳥が鯢魃の時喉が渴いてなりませんが近邊の農家へ飛び込  
み「御無心ながら水を一杯飲んで下さるまいか決して水を頂戴した  
ばかりで御禮を爲ないやうな私たちでいありません山鳥は主公の植  
へて御座る葡萄の根の周圍を穿て土を和らげ本年から葡萄の實入の  
好くなるやうに仕ませう蜂は劔を振廻して盜賊あどの來ぬやうに志  
ませう」と云ひますと農夫の頭を掉り「イヤ〜我れは以前から二頭  
も牛を飼て其牛の約束も何も志ないが好く働ひて呉るから汝達に水  
を遣るよりは牛に遣る方が肝要じや

馴々しく言ふからとて新來の人を召使ふより少〜の不足な所が  
あつても舊來の人を使ふのが安心でございます

●第二十四譚 鬪鶏と鶯

二羽の雄鶏が一箇の餌壺を奪合ふて果は蹴鬪をはじめトウ〜乙鶏  
が蹴付けられてヨロ〜して鶏舎の一隅へ逃込み小さくなつて隠れ  
て居ますと勝誇つて居る甲鶏の屋根の頂上へ上り鼓翼をしながら大  
聲で凱歌を奏げました其時丁度或る大鶯が空中を飛んを居て好き餌  
食を見つけたと看なく〜舞下つて唯た一掴に攫去らひ遙く虚空へ飛  
上りました、さうすると最前敗戦た乙鶏が鶏舎の一隅から飛で出て  
以前奪合た餌壺を我所有に〜ました

戦争をしてても餘り勝ほこると不意な失敗を招きます

●第二十五譚 羊飼と家犬

或る羊飼が黄昏になつて其處等に遊んで居る羊を呼集め欄の内へ追  
込む時誤つて狼を羊と共に閉込て氣が付ずに居りますと家犬がこれ



を見て居て「主公彼の内へ狼を追込んで置いて羊が食はれないと思召すか

盗賊の目前に金銀を置いて奪られるのを怪しひことはございませ

●第二十六譚 農夫と蛇

或る農夫が冬の黄昏に野から歸つて来る途中で一疋の蛇が凍へて死なうとして苦んで居るを見付け此奴は人の嫌がるものだが苦んで居る處ろを見ると不便なものだどソツト取上げ自分の懐中へ入れて二三丁歸つて來ますと蛇の暖氣を受けて活潑となり禮も云はず却つて農夫に噛付き傷痍を負せましたので農夫は其儘斃ほれ「此奴を憐んだばかりでツイ如斯傷を受けた」と言ながら黄泉へ旅立を志ました人にも恩人を恩人と思はず還て害を加へるやうな人非人が間々

あります

●第二十七譚 北風と日輪

或時日輪と北風が邂逅ひ力自慢が争ひの種となりましてイヤ拙者が強い、イヤ拙者だといふ中然らば相互に証據を顯はして強い弱いを決まやうとの事になり北風はあらん限の勢力を出して大嵐を吹起すますと寒氣は俄かに烈しくかり旅人などの狼狽て雨具を取出すやら急に布子を着て寒さを凌ぐやら大騒ぎソコ今度ハ拙者の番だと日輪が雲間からヌツト顔を出し先づ平凡の光を放ちますと雲を何處ともなく散て仕舞ひ寒さも漸々消へ旅人の暖かになつたと喜んで居ますとだんく熱くなり果て布子を脱ぎ下に着て居る襦衣まで脱いで仕舞ひ到頭眞裸になつて水へ這入りました

●第二十八譚 釣人と小魚



或る所に釣魚を生業とする小利吉と云ふがありまして夏の永い日に終日釣をして居ても小魚の一尾も罹りませんので止して歸ろうと思つて居ますと漸く一尾の小さな魚がかゝりました、スルト其小魚哀れな聲を出しまして「御助け下さりませ格別な品でございませぬ価値も何もないものでございませぬ何卒御助なされて本來の水中へ逃して下さりませ私へ直に大きな魚になりますから其時お手にかゝつて立派なお料理に使はれます」と託言をまよますと釣人の首を掉して「イヤ〜一旦捕へた汝を許したら其時汝は「サア捕て見給へ」と大言を吐くだらう

未來の不確實な大利を得んとするより現在の確實な小利を得る方が勝ててございます

◎第二十九譚 福神と大工

或る大工が随分職業を勉強して居ながら如何言ふものか例も貧乏で困つて居ります何ぞして困らぬやうになる工夫はあるまいかと近邊を見廻しますと棚の上に福神の像がありましたソコデ此福神に毎日〜供物を捧へ一心不亂に祈り申したが一向に効驗もなく益々貧乏になりまして是でいならぬと思ひ信仰の二の次にして職業に身を入れ夜晝なく働いて居ますと足らぬながらに生計が立つやうになりまして、ろこで大工のハツキとなり此奴のおかげで大損をしたと例の福神を神棚より引下ろして有合はす斧で打毀しますと其神腹から金銀が觸れ出ました大工は驚いて「是は合點の行かぬことだ吾が祈つた時には少くも應驗がなくつて今更打毀はすと如斯に御利益があるとは

職業を勉強するのが第一の信心でございませぬ



第三十譚

山羊と野葡萄

或圃に葡萄の樹がありまゝたが其葉は青々と生茂り實は鈴のやうに  
 生て居ると或る日一頭の山羊が来て其葡萄の樹の皮をかじり芽を食  
 あらそうとまますので葡萄は大きに腹を立て「汝は己れは何んの恨  
 みがあつて其様事をするぞいつか此返報をするから覺て居ろ汝が  
 犠牲になつて神様の前にひかれて來た時にやア汝の頭に注て遣るた  
 めに酒を製ておくぞ

復讐は早晩か仕遂げることの出来るものですから決して他人に  
 悪事を仕向けてはなりません

第三十一譚

犬に噬れた人

或人が犬に噬れて傷を受けまゝたとき誰れか此傷を治療て呉れる人  
 はいかと東西南北尋ねて居ますと途中で知己者に邂逅まゝたゆゑ

第三十譚



山羊と野葡萄

第二十二譚



犬と人

第四十譚



野牛と山羊

第四十一譚



絶壁の山羊と平地の狼

第四十四譚



羊肉を食ふ牧羊者

第四十五譚



犬と生皮



其話をすると知己者は「ア、夫れはく御氣の毒ダ汝夫れを治し度  
 なら斯う爲なさい一塊の麵包を疵口の血の中へ漬けてそれを前さ  
 んを噛んだ犬にお遣なさいさうすりやア直に治るぜ」と言ひますと噛  
 れた人は苦笑ひをして「御親切は難有が汝のいふとほりにすると我は  
 町中の犬に噛まれますだらう

敵に恩を與るは我を害する敵の手術を増すのでございす

第三十二譚 猿と駱駝

或る時山林で獸類が大集會を催しますと猿が一座の興にとて彼の猿  
 舞を演ました、ところが中々上手にやつてのけたので衆獸興に入り  
 一時喝采の聲が山林を動かすばかりでございまして其時駱駝ハ猿が  
 喝采られたのを羨ましく思ひ嫉さの餘り遅々と座上へ進み出で踏々  
 舞をはじめますと満座の獸共は顔をくかめ其様見苦しい踊りは見度



ないどガヤ／＼騒ぎ立ち果ハ皆々立かゝり有合ふ棒などを打振り駱駝をたゝきすへて、到頭山林の外へ追出しました

何事によらず自分相應の事をせぬと人に笑はれます

◎第三十三譚 好事な小兒

頓太郎と云ふ一人の小兒は自分の眼に觸れた物事は何によらず其儘には去て置かないと云ふ好事な小兒で祖母さんの眼鏡を毀はしたり又た人の眼へ嗅烟草を入れて困らすやうな事ばかり仕出來ますので或日其母が「コレ頓太ヨ汝は何事にも出過るから後には自分で困ることが起るのだチツト心得なさいヨ」と言ひましたが頓太は一向頓着しないで益々惡戯が増長して母が綴かけて居るあみ物を何時の間にか解てしまつたり妹の毛糸細工が卓の上に置いてあると其糸を穢したり園丁が雜草を除て居るとて手傳をするるとて大切な草花まで引

拔て園丁を怒らせたり乳兒が玩弄の瀧車を持って遊んで居ると己が車掌ダカラ瀧車は己れの自由にする杯と言て乳兒を泣かせ姆に叱られて育兒房から追出されたりと云ふ始末でイヤハヤ箸にも棒にもかゝらぬ小僧でございますある日の事で父が何かの機械を買入れ機械師が持て來て父と話して居る隙を窺ひ徐々其機械の置いてある所へ行きソツト戸を開けて見ますと機械に種々の鎖も着てあり又た附屬品も澤山ありますうこで頓太は嬉々氣に手を摩みながら其機械をのこらず解ほどきて又素のやくに組立て見やうと考がへ側に在る椅子の上に這上り両手を鎖の柄に觸れますとやがてアレ、アレ、泣叫びますから何事かと家内の人々が往て見ますと頓太ハ電氣に感じ手を離さんとしても離すことが出來ず苦んで居ました其時阿父は苦笑をしながら「到終汝は自業自得の目に遇たナ」と機械を用いて其手を離



して遣りますとさすがの頓太も是に懲々して如何に叱られても一言の答もなく狐鼠々と自分の部屋へ逃込み熟々と考へますと此廣い世界には電氣も勝る恐ろしい機械が幾許もあるから滅多に手出へ出来ぬと思ひ此電氣がトンダ頓太の懲りめになりまうた

第三十四譚

鳥と鵲

或日一羽の鳥が歎息して「アノ鵲と云ふ鳥は其飛方や鳴聲で未來の吉凶が知れるといふので人に尊ばれるが己等は如何もつまらん鳥だ」と獨言をいひながら近邊を見ますと二三人の旅人が遣て來ますから「己れも一番鳴て見ませう旅人が何と言ふか」と直ぐと道傍の樹にとまり聲を張あげて、カア、カアと鳴きますと旅人の一人が喫驚して仰向ながら「ハテ彼鳴聲は何の前兆だらうナア」といひますと同伴の一人が笑ひながら「サアノ、行きませう」ナニ彼れは何の前兆でも

ありヤアない鳥のカアだ

身分不相應のことをすると世間の笑ひものになります

第三十五譚

老牛と小牛

一頭の老牛が日暮前に自分の部屋へ歸らんと狭い路を無理に通らうとて骨を折て居ますと之を見て居た小牛がわざと出て來て「私が先へ立て汝の通り好い道筋を教へませう」と云ふと老牛が頭を掉て「構ハツゝやるナ乃公は汝が生れない前から此路をよく知て居るのだ

兎角老者は強情で困ります

第三十六譚

老爺と二人の娘

或る爺父が二人の娘を持て居ましたが一人は植木屋へ婚禮け一人は製瓦工へ嫁入らせ夫より二三日も経つと其植木屋へ尋て行き「如何



じや家内の居合のよいかな如何な様子じゃ」と尋ねますと娘の「御案  
 じ下さいますな萬事都合が宜う御座ます、うして我家の營業では一  
 ツの願事があります何んでも植木の爲めには充分に雨が降らないと  
 なりません、うここで私は雨の降るやうに願って居ます」と云へば爺父  
 は「左様か夫は先づ一安心だ」と其家を出て今度は瓦屋へゆき「姉の  
 方は大層好都合じゃが汝の方如何な塩梅じゃ」と問ひますと娘  
 は「ハイ難有う御座います家内の居合も至極宜う御座まして私ほど  
 んど外に苦勞ありませんが何んでもお天氣が續きまして日が焼つ  
 くやうに照りますと瓦が好く乾上りますから私は好天氣のみ願つて  
 居ます」と言ひますので爺の途方に暮れ「ア、汝は好晴天を願ひ姉の  
 方で雨を願ふては私は孰を願ひませう  
 業に依て其の願ひ事の違ひます

第三十七譚

三人の商賈

或市府が敵に圍まれた時何して防いだら宜からうと町中の人が集り  
 會議を開きまゝた其時煉化石商が第一番に進み出まゝて「此防禦法  
 に用ふべきものは煉化石より外に宜いものありません」と云ひま  
 すと材木商が勃然として「イヤ材木を用ふるのが第一の計略でござ  
 います」と辨じまゝたスルト革商が憤然とあり「諸君は發言に税が出  
 ないと言たい事ばかり言ひつゝやる世の中に革ほど結構な品物が  
 ありますか  
 人は皆な自分の爲めのみをいふものでございます

第三十八譚

賣卜者

一人の賣卜者が市場へ店を出して人の吉凶を卜なつて居ました或  
 人が大急で駈けて來て「ナイ爺翁今も汝の家の戸が打破はれて居る



から怪しいと思つたら盜賊が忍入たのダゼ」と知らせまゝたら賣卜者へ仰天して手に持った笹竹の其處へ投出ゝ急ぎ我家へ走せ歸りますと隣家の人々が入口より立て居て「イヤ先生遅かつた先生を人の身の上を占ひながら自分の身の上が出来ぬとは如何したとダ  
賣卜者身の上知らずと此の事を言つたのでございませう

◎第三十九譚

羊の皮を着た狼

或時狼が羊の皮を着て自分の姿を扮へ牧羊の群に入交つて羊の餌を食ひ素知らぬ顔をして居ますと牧羊者へ夫とも知らず夕方になつたので羊を欄内へ追込み閉鎖を付けましたから狼は出る事が出来ませんスルト程経て牧羊者は翌朝の肉がないとて羊を一疋とり來て何の氣も付かず羊の皮を着て居る狼を見て此奴を甘さうだと其場で打殺してしまひました

狡 獵 に 世 を 渡 ら う と し ま す と 果 は 此 狼 の よ う な 禍 に 遇 ひ ま す

◎第四十譚

野牛と山羊

獅子に追駈られた野牛が道路の曲角でちよいと獅子をばづゝ山羊の栖むで居る洞穴へ逃込むと山羊は腹を立て角で突出さうとするゆゑ野牛の小聲で「汝の勝手に吾を窘辱めなされ吾が如斯にされるのを耐忍して居る何れも汝が畏いのでない彼の獅子が通り過ぎて仕舞ば野牛が強いか山羊が強いか直に判断るんだア

友人の困難に乗じて我が利益を得んとするは惡ひことです

◎第四十一譚

絶壁の山羊と平地の狼

一頭の狼が峻嶒な絶壁の上で草を食つて居る山羊を見付け餌食にやうと思ひましても自分が行かぬ出来ぬゆゑ何んでも彼の山羊を下へおろして噛殺してやらうと思ひ「ナイ山羊さん其様な處に居



て若く轉つて怪我でもして見なさい夫れころ大騷動だ此地にお前方  
 が食物にする極好ひ草が澤山あるぜといひますと山羊の上から大き  
 な聲で「イヨー狼さんか先づ汝のお勧めなさることは御免を蒙ろう  
 汝が親切に言て下さるのは私等への饗應でなくてはなかつて汝が自分の馳  
 走にするのだらう  
 一寸來いに油斷するおと言ふことがあります

◎第四十二譚

老衰の獅子

或る獅子が漸々老衰して死ぬより外に望みのない身体になつても誰  
 も介抱してくれるものもなく苦しい氣息を喘て地上にへたばつて居  
 ますと野猪が通りかゝり昔時の怨恨を復して呉れんと鋭い牙で突か  
 かつて來た所へ又た野牛が來て己れも日頃の讐だと後ろから角を  
 突込みましたすると驢馬が此様子を見て「彼の鹽梅で己れにも復

讐が出來さうだ彼れの最後に少く窘めて進りませう」と是も出て來  
 て獅子の顔を散々に蹴亂しますと死かゝつた獅子が吼出して強者に  
 愚痴にされるのは堪忍も出來るが汝の様を弱者に蹂躪られては乃公  
 ア死んでも死きれねへ哩

若き時他をあやめた報ひは恐ろしいものです

◎第四十三譚

海岸の旅人

二三人の旅客が海岸を通つて少く小高い岩の上に来た時沖を眺望め  
 遙か遠方に浮んで居るのは何んでも大きな船舶に違ないと思ひ彼の  
 船舶が港へ進入るのを見やうぢやないかと岩頭へ腰をかけ近寄るの  
 を見ると大船ではなくて小舟の様に思えられたが益々近寄るのを  
 能々見ますと小船でもなく一把の柴を浪が持て來て難なく濱邊へ打  
 上げました



察者の了簡で些小いものも巨大に見えます

◎第四十四譚 羊肉を食ふ牧羊者

或狼が小屋の前を通りかゝると内で何か話聲がするので狼はソツト覗いて見ますと牧羊者が四五人寄合て羊の股を切て喰ひながら如何も甘ひ味ではないかと言つて居るので狼は此の体を見て「太い奴輩が彼奴輩が若く我を獲へたら矢張り美味ダなど云つて食やアがるだらう

他のすることは悪い様に思へれます

◎第四十五譚 犬と生皮

飢へ疲れた犬共が河邊を歩行て居ましたたが聴て製革人が河の底へ沈めて置いた生皮を見つけ彼の革には未だ少く位肉が残て居るに違ひないから食うではないかと相談を致しまたたが水の中ゆゑ出す事が

出来ないので夫じや手の届くまで水を飲乾さうぢやないかと瘦犬どもが口を揃へて水を飲初めましたたが飲でもくも飲きれません其中に腹が裂てトウく残らず往生しました

無理かことに目をかけると自分の命を捨るやうな事が間々あります

◎第四十六譚 游泳をする少年

或る少年が游泳をして初めは面白さうに浮たり沈んだりして居ましたたが漸々深い處へ流れ込みアワヤ溺れやうとする處へ恰好河岸を老人が通りかゝりましたから少年ハ一生懸命に聲を振り立て「何卒助けて下さいと頼みますと老人ハ立止つて直に助けやうともせず「何故其様危険いことをするのだ是からはチト心得たが好ひ」と長々と教訓を述べて居ますゆゑ少年は堪らなくなり「ナイ老爺助けて呉



れ教訓の後にしてサ

危急な時は口より手が肝要でございます

◎第四十七譚 家主と家犬

山中に住居で居る一家の人々が雪に降り籠められて他所へ食物を求めに行くことが出来ないので養育た羊を殺して食ひ夫でも未だ雪が降りつゞひて晴間がないゆゑ余儀なく耕牛を屠て喰ひかけますと家犬どもが其を見て相談をいじめ「サア逃げやうぢやアないか主公は平常骨を折て労働く牛でさへ殺すくらゐだから如何して我輩を免すものか

其人の親族に接待の悪い人に心は計せません

◎第四十八譚 野猪と狐

野猪が或樹の下で牙を其幹へ摩擦して磨で居ますと其處へ狐が通りか

第四十六譚



少年 游泳をする

第四十九譚



獲物を獅子に 奪れたる 狼

第五十八譚



老衰の 獵犬

第五十九譚



山羊仔と 狼

第六十一譚



鹿と野 葡萄

第六十二譚



犬と秣槽



かりまして聲を掛け「ナイ猪チヤン足下は何をして居るんだエ獵夫も獵犬も其處等に見へかいでトント危殆ことのないのに大層お働きダ子ー」といへば野猪へ回顧て「左様さケレドモ騷動がはじまつてからは私ハ牙を磨で居る時間がかいヨ外にいろく用事があるから軍を見て矢を知ぐとは昔時からの戒でございます

◎第四十九譚

獲物を獅子に奪られた狼

或る狼が牧場の欄内に入れてある羊を奪て自分の洞へ持て来る途中で生惜く獅子に邂逅せ折角掠んで来た羊を奪取れますと狼ハ逃出モウ吾の身体だけは安心だと云ふ所まで来て「獅子ハ不埒ものダ乃公の物を取りやアがッたな」と大聲で怒鳴ますと獅子ハハ、アと笑ひながら「ヘン其處で巳れが考へた汝に此羊を與れた牧羊者を汝の良朋友ダナ



自分の不正ことは見ぬが他の不正ことは、よく、見ぬます

◎第五十譚 狼と羊の番犬

數多の狼どもが相談して羊の番をして居る犬どもに向ひ我輩は足下等に聞て見たいと思ふことがあるが全体足下等も形容から何から我輩に似てゐるのに何故心情だけは我輩と變つてゐるだらう、さうして足下等へ何故我輩と兄弟の様に睦敷暮さなからう、考へて見ると我輩は足下等と違つてゐる所がホンの一つあるばかりだ我輩は人類の束縛も受けず實に自由自在に消光してゐるが足下等は人類にへいへい云て匍匐屈み色々の用事を仕て遣て加之鞭で毆かれ、まだ其上に我輩の大嫌な首鑑を籍められて何故足下等は何とも思はないで居るのだらう足下等へ彼奴等の爲めに羊の番をして遣て、ううして彼奴等が、まやぶり糟の骨を貰て嬉しがつて居るのは全体如何いふ了簡

ダエ若く足下等が我輩の言ふことを聞入れて我輩に羊を與るなら足下等にも腹一杯相伴をさせて以來交情好く暮しますぜ」と云ひますと番犬どもは成程狼の云ふことは皆な最もだと同意して狼の洞穴の中へ這入りますと狼共は忽ち四方から飛かゝつて番犬を寸断くに引裂き羊も食ひ盡しました

迂濶に他の言葉は信じられないものです

◎第五十一譚 馬と騎馬武者

或る騎馬武者が戦争が始まると其飼馬に乗て戰場を馳まわり例も非常の軍功を立てますから實に我助力者だと考へ馬を大切にいて秣麥など澤山食はして愛しておきましたサテ世の中も穩かになり戦争の噂さもなくありますと忽ち其飼方が悪くなり粗末なものばかり食へせ荒仕事のみさせて置きますと其中に世の中が亂れ又も戦争が始



まりましたので主人公ハイザ出陣せんとやがて其飼馬を厩から牽出し立派な馬具を着せ自分も亦た重ひ鎧を着てユラリカツシと打跨がり一鞭あて、駈出しますと馬は忽ち膝を折り主人公ハズデンドウと扱出されましたスルト馬ハやうく起上り長い顔で主人公を見あげ「旦那、貴君はモウ歩行て軍にお出ささい何故といふに貴君は私を馬から驢馬に替へなされた、夫れだから今ま私が直ぐに馬に變ることハ出来ません

千里の馬でも使ひやうで駑馬にも劣る事があります

◎第五十二譚 鴉と水星権現

或鴉が霸套にかゝり逃れやうとくても身が動かかいのでアポロ菩薩に祈願をかけ「何卒お慈悲を以て此大難を救はせ給へ此大難を救はせ給は、御前に名香を供へ奉らん」と誓ひを立てましたソユデ忽ち

難を逃れましたが誓ひに背き名香を供へませんので又々霸套にかゝり又候アポロ菩薩に祈願を爲すも違約の廉で聞届けはあるまいと思ひ今度は水星権現に願ひ「此大難を救はせ給へ此大難を救はせ給は、名香を供へ奉らん」と前と同様の誓を立てましたスルト権現忽ち出現れ給ひ「汝ハ不届至極の奴である汝ハ最前誓を破り約束に背き、奴ありサレバ如何にして汝を信ずべきぞ」と宣ひ遂に救はせ給はざりしと

人も一度約束に違へ、其後如何に確實なる約束を爲すとも誰れも信用するものハありません

◎第五十三譚 二頭の騾と盗賊

二頭の騾が各々荷物を脊負て行きましたが一頭の荷物ハ貨幣箱で一頭のハ穀物で、ございまして、うここで、貨幣箱を脊負てゐる騾ハ如何に



も吾れハ價值のあるものを持つてゐるぞと云ふ意氣込で頸に着けた鈴を振鳴らし蹄音高く行きますと穀物を着けてゐる螺ハ勢ひもなく、すびくと後から行きまゝたヌルト不意に樹陰から盜賊が顯われ出て刀を抜て宰領を追ちらし貨幣箱を奪ひ其騾に傷を負はせ穀物を脊負て居る騾にハ目も呉れずに逃亡せまゝた其時傷を負はせられた騾ハ自分の不幸を歎息ゑて氣息も絶へくに倒れて居ますと穀物を脊負てゐる騾ハ「私ハ實に嬉しいヨ此位の騾動ハ何んでもないことだと思ひます何故と言ハ私ハ傷も付けられず荷物も失ひませんから寶を持つて居ればころ身の危いことでもあります寶がなければ安心なものでございます

第五十四譚

鳥と羊

一羽の鳥が羊の脊に止つたゆへ羊ハ面倒ながら鳥の思ひ通りにして

長時間東西南北歩行て居まゝたが爾々續かなくなつて「鳥さん若く汝ハ斯なことを犬にでもしたなら彼奴ハ直に牙を出して食ひ殺すだらうに」と云ひますと鳥ハカラくと笑つて「ヘン已れハ誰れハ馬鹿にして構はない誰れハ諛ハなければならいと云ふことを知てるワイ夫れだから已れハ老年になるまで生延てゐるんだア

何事をするにも敵手を見るのが肝要でございます

第五十五譚

美男兒と醜女兒

或る人が男女一人づゝの兒を持つて居まゝたが男の方ハ至て容姿か美しく女の方ハ至て醜うございまゝた、其男女の兒ハ或る日母親の化粧部屋で遊んで居て不圖鏡に顔を向けまゝたが男の子ハ自分の容姿が美しいので自慢をしますと女の子ハ自分の容姿が醜いので憤怒を發て口論をはじめ果ハ父の膝下へ來て「父君、阿兄ハ女でもないくせ



に鏡を見て私の事を彼れ此と誹謗いひますヨ」と云ひますと父ハ「コ  
 レサ二人とも其様に口論をしてはならないヨ二人とも交際よくして  
 遊ぶが宜い兄ヨ汝ハ以來鏡を見たら何か悪ひ行狀をして奇麗な顔を  
 汚くしないかと氣を付けるが宜い又た妹ヨ汝ハ毎日鏡を見て何んで  
 も女の徳を磨ひて容姿の醜いのを償ふ様にしたるものだと心を用ひ  
 るが宜い二人とも今ま阿父の言つたことを心に記めて忘れてはなら  
 ないぞ

◎第五十六譚 鼯鼠の母と子

天然から盲目の鼯鼠の子が母にむかい「阿母私ハ何んでも見分ける  
 ことが出来すヨ」と云ひますと母ハいよく見分けが出来るか如  
 何だか試して見んと見の前へ一塊の乳香を置いて「是れは何んダ」と尋  
 ねますと兒ハ「阿母是れは小石ダヨ」と答へましたるこで母ハ笑ひな

がら「オヤ此兒ハ如何したんだらう見分がつかないばかりじやない  
 嗅ぐ事も出来ないワ

◎第五十七譚 駱駝と歳神

一頭の駱駝がたま〜野牛に邂逅ますと大層強さうな角を持って居る  
 ので駱駝ハ嫉ましく思ひ或る日歳神の前に至り「他の獸にハ勇ま〜  
 くも又た強氣なる角を與へ給ひ〜に何とて吾には與へ給はぬぞと怨  
 じますと歳神ハ大に怒り給ひ「其方にハ大きな強ひ身軀を與へ置き  
 たるに未だ満足の体もなく角をも與へヨなど不届至極の申條かな」  
 と其望を許し給はぬのみか豫て與へ置かれた耳の一部分を取あげま  
 した

前に一物を得て後に又た一物を得んとすれば前の一物も併せて  
 失ふことがあります懋心ハ慎まねばなりません



◎第五十八譚

老衰の獵犬

昔時如何な獸にも負けを取らないと云ふ強い獵犬も漸々年を経て老衰すると役に立ぬやうになり或日主人に隨て猪獵にゆき漸つと一正の猪を駈り出しその耳に噛付き暫時闘つて居ました。牙がくまらなないので其猪に逃げられ途方に暮て居るところへ丁度主人が駈て來て大失望をして嚴しく獵犬を責め鞭で打すへんとしますから獵犬は怨めさうに主人を見あげ「主公何卒お助け下さい故意といたのでへございません全く私が老衰して居ますからツイ取逃したのでございませぬ今日過失はお怒りなさらぬで少くも昔時の辛勞を察して下さい

軍人に養老金を賜へる等々昔時の軍功を思ふところからの事でございませぬ

◎第五十九譚

山羊仔と狼

屋根の上に居る山羊仔が不圖下を見下しますと狼が徐々と歩行てるゆゑ散々に悪口しますと狼は立止て上を睨み「其様に吾を悪く言ふナイ此卑怯ものめ何も汝が強いのぢやアかいぞ汝の居處がよいからダア

人の威光を借りて暴をはたらくもの此山羊仔の所作を見て予ト考へねばなりません

◎第六十譚

旅から歸た人の高慢

外國へ旅をして歸て來た人が旅中諸處で爲た手柄話ををじめ「サテ拙者がロイツに滞在中七八間の處を一足に跳躍だ事があります其時は見物して居た人々が皆な感心して居ました是れは虚説でないのです其所には澤山の證人があります」と言つて居ますと其話を聞て居た



一人が笑ひながら「其の實に御話の通りでございませう、志の〜話説ばかりで、眞實と思はぬ人もありませうから、今此處をローツとしてサア跳躍で御覽なさい

論より證據と、このことで御座ます

◎第六十一譚 鹿と野葡萄

或鹿が獵夫の目を掠め野葡萄の生茂ッてゐる中へ隠れますと獵夫へ餘り駈けすぎて鹿の居處を通り越し其行衛を見失ひました、ろこで鹿をマア〜是で事濟になつたと安心して其生茂てゐる野葡萄の葉を食て居ますと後から來た獵夫がボリ〜と音のするに氣が付き取て返へ〜「ヤア鹿へ爰に居タナと生茂の中へ矢を射込むと鹿か其矢に中られて苦〜みながら「吾が斯うなるの、當然のことだ、吾を救つて呉れた葡萄の葉を喰つたものだから

恩を受けながら其人に害をすると上帝が看過て、おきません

◎第六十二譚 天帝と密蜂

密蜂がはじめて花汁を探り覺へたとさうの初穂を天帝に供へんとて或る日天上に飛行き斯様珍重ものを手に入れました、全く尊神の御恩徳でござりますと慎で供へますと天帝は殊の外よろこび給ひ「是ハ殊勝の事ぢや此報へ何なりとも汝の望みに任すべ〜」と仰に密蜂は恐る〜「嗚呼威徳赫灼の尊神何卒哀憐を垂れ給ひて此賤蜂の尾頭に一本の利劍を援け給は、我密汁を犯すものあるとき即坐に刺殺し申さん」と請奉りますと天帝は殊の外人類を愛し給ふゆゑ密蜂の願を聞き大に憤怒を發し給ひて「今汝が請ところの如く汝の花汁を護りて人を殺すの目的にては我れゆめ〜汝の請を許すまじ去りながら今茲に汝に援くべき劍あり此劍は人の身體を刺すことあら



バ人に害なくかへつて汝に害ありて汝の命を即坐に終るべしよくよ  
く慎むべし」と懇ろに諭し給ひて其劔を授けられまゝした

◎第六十三譚 犬と秣槽

或犬が秣槽の中に臥て居るとき二三疋の馬が其秣を食へんとて其處  
に來かゝりますと犬へ寄付けじと大きな聲をして吠罵るゆゑ一疋の  
馬が腹を立て長ひ顔をふくらし「見ろ何だ此罰當りメ呆犬が喰へも  
くないくせに吾れにまで喰せないナ

此犬の所作は世間で云ふ眞の意地悪でございます

◎第六十四譚 鶴と雁

或日鶴と雁が同じ畑より下りて餌をあさつて居ます處ろへ狩人が出て  
來て網にかけやうとしましたソコで鶴は瘦せて身體が軽いゆゑ是を  
見ると鼓翼をして飛で逃まゝたが雁は肥つて居て身體が重いゆゑ急

に逃げ去ることが出來ないので遂に狩人に捕られまゝした

世の中の騷動ときには重いものより軽いものゝ方が宜うござい  
ます

◎第六十五譚 猿と海豚

大洋の渡航に船中で興具にするため猿だノ狒狗だノを連れるのを  
昔日からの習慣でございませうが或人も乗船の時猿を連れて居まゝした  
然るに其船は希臘の海岸を離れて暫時すると大風になり忽ち覆没ッ  
て乗組の人々皆な海中へ沈まゝたが其時或る海豚が猿の浮たり沈  
だりして居るを見て人かと思ひ助けてやらうと直様脊に乗せ海岸を  
目掛けて泳ぎ行く中やがてアデン近傍の陸が見へて來たゆゑ「貴君  
ハアデンの御方カナ」と尋ねますと猿は吾は「アデンの市府で有名  
ものゝ子じやと答へまゝしたソコで海豚ハ「然らバピレーヌを御存じ



だらうと問ひますと猿ハピノースは有名の港と云ふことを知らず人の名だと思つたゆゑ「ハイ其人ハ能く私の知て居る方で私とは兄弟の様にして居る」と答へ「まゝた海豚は猿の虚言を吐くのハ呆れ」汝の様な虚説を云ふ奴は随意にするが宜い」と云ひながら猿を投出して波の底に沈みまゝた

よく解つた虚誕を吐ますと誰でも愛相をつかへます

◎第六十六譚 牡獅子

或る時諸の獸が集會を催け各々自分の眷族の澤山なのを誇つて居ましたたが孰が多いとも判然せぬ處ろから一同申合せ是から獅子のどころへ行き誰が一番多いか問ふて見やうと群獸打うろひ獅子の洞窟にゆき、まづ牡獅子に向ひ「時に汝は何疋お子を擧げやツた」と突然に尋ますと牡獅子は群獸を見て笑ひながら「私かエ私は唯ツた一疋擧

まゝしたばかりだが、それでも如斯雄兒でス

粗末な品物の多いより少くとも品物の好い方が所有者のためです

◎第六十七譚 蛙と鼠と鷹

或鼠が不圖したことから不幸になり畑に住居をせねばならぬことになりまゝたが或蛙が何時の頃よりか此鼠と懇意になり有一日「或所に汝の好物を食餌があるから其處へ一緒に参りませう」と相伴て出かけまゝたが蛙ハ顔に似合ぬ親切者と見せまゝして「若く汝が路を取違ていならんから」と自分の後足へ鼠の前足を繋ぎつけ鼠の案内をしてピヨコリ〜と飛で行まゝたが小河の邊へ参りますと俄かに惡心本心をあらわし断はりもせず水中へ飛込み鼠を引摺り込みまゝたから鼠ハ七轉八倒苦〜がツて浮たり沈んだりするのを見て笑つて居



りますうち鼠はとうく水に溺れて死ましたが其死骸ハ蛙の足に繋がれたまゝ水のうちへに浮みあがりますと天空を飛んで居た鷹がこれを見つけない意に飛下つて鼠を攫去て一翼に飛揚りますと蛙も共に空に吊され同じ禍に罹りました

隣家の家を焼拂はんと火をかけて我家も類焼して同じ難儀に罹るハ當然のことです

◎第六十八譚

鹿兒と其母

或日鹿兒が鹿母にむかひ「阿母さん汝は犬よりか大きな身体で走るのも迅速く其上長い角がめつて如何な敵でも突倒すことが出来ますのに何で如彼に犬が怖いのですと問ひます」と鹿母ハ微笑ながら汝の云ふ通りぢや私も何んで犬を恐るか自分でも解らぬが私の耳へ犬の吠る聳が這入ると此足が逃たがるよ





如何な名案でも臆病ものに勇氣を付けるは六ヶ敷話です

◎第六十九譚

鷲と狐

或る鷲と狐が何時の程にか懇意になりお互に近處に住居を志しようと云ふ相談が出来て鷲は或る大木の枝に巢を掛け狐は其根に穴を掘りて洞穴をこしらへ懇意にして居るうち狐は出産して奇麗な稚子が出来ました、そこで狐は兒に食はず餌食を探しに出ますと鷲は自分の餌食がなくなつた所から悪心を起し親狐の留守を狙ひ其住家へ下て来て其兒を攫去てムシヤク食て仕舞ひました、夫とも知らず狐が歸て見ると斯の次第も大怒りて我兒を奪られた復讐に何してやらうかと考へて居ますと折柄近所にある神社へ村の人が山羊の肉を供へましたソコで狐は不圖思ひつき山羊の肉を少くと燈明を持って來て樹の下より火を放け鷲の兒を火煨りにして母鷲の見て居る所で食ひつ



くして仇を報へしまつた  
 上位に居る暴君が一時人民を虐げるとも早晚人民の復讐に遇ふ  
 ことがあります

◎第七十譚

小兒と蟲と蠍

蟲を取て居た小兒が手に澤山蟲を持て居ながら不圖蠍を見付て  
 是れも蟲だと思ひ最一ツ此奴を取て遣らんと手を延ばしつと蠍  
 がこれを見て尾劍をふりたて「坊チヤンサア捕へて下サイ汝が私を  
 捕へたら直に放させてやりませすおまけに其蟲までも

無事の時に兵隊を養ておくのは無益のやうでも有事ときには平  
 生の無益を償ひませす

◎第七十一譚

狐と山羊

或る狐が溜井に落ちて上らうとくても手係りがないので如何したら

宜からうかと思案をして居るところへ山羊が通りかゝり喉が渴いて  
 堪らないから水を飲まんと来て見ませすと狐が中に居ますから「狐さ  
 ん水は好う御座いますか澤山ありますか」と尋ねますと狐は自分の  
 苦しい容姿を隠し愉快な顔をして「イヤー山羊さんか大變甘い水  
 だヨ何とも言へない好い水だ」と答へまつた、ソコで山羊は何の思慮  
 もなく直に飛込で思ひのまゝに水を吞ますと狐は「汝と吾どが此  
 中に居ては場所が狭いから吾が先へ上るといやううこで斯うだ汝が  
 前足を縁へ掛け頭を屈めて居ると吾が汝の脊へ乗て井外へ飛上るた  
 らう夫から汝が上るときに吾が上から引揚げるのサ何と好い分別だ  
 らう」と言ひますと山羊は最のことと思ひ狐の言通りにして居ます  
 と狐は山羊の脊を踏臺にして井外へ飛上りまつたが山羊のことは構  
 はないで後をも見ずに逃去まつたスルト山羊は大聲を揚げ「コレ



狐さん私が上る世話をしてないか」と言ひますと狐は後面を回顧き汝は愚痴な奴だなア汝が其髭の半分ほども腦を持って居たなら上ることが出来るか出来ないか飛込む前に能く見て置さうなものだ爾すれば其様難儀のありやアくないヨ

◎第七十二譚 蜂と蛇

或る蜂が蛇の頭にとまり尾の劍でプスリと刺しますと蛇の身を震へし如何して此敵を避けて宜いか如何して此奴を追拂つて宜いか頓ど思案が出ないので死ぬ苦痛をして居ますと丁度其處へ材木を載せた車が來かゝつたゆゑ漸く其處までノタリ行き軋つて居る車輪の下へわざゝ自分の首を差入れ「エ、畜生め吾も死ぬ代りに手前も殺すぞ

自分も死ぬ覺悟なら敵を殺すの容易です

◎第七十三譚

乳母と狼

或る日狼が餌食を探して或家の戸口に來ますと小兒の啼てゐる聲が聞えますので耳を立て聞きますと「坊や溫柔志ないと狼に喰はせますぞ」といふ乳母の聲が聞えます狼は志めたり好餌食にありついたらと窓の下に隠れて待て居ましたか早や日も暮るゝり冬のことで大分寒くなつて來ましたか棄て行のも残念とシツと辛抱して居ますと其中に又乳母の聲「坊やハ今日ハ一日溫柔かつたヨ若く狼が來たら敲き殺してやらうね」といひますので狼は吃驚して洞穴へ逃歸りますと細君ハ「コレ、モシ貴狼は大層お疲れの様子だが今日は一日何處を歩行て居たんだエ」と問ひますと狼は吐息をつき「何故と言たら己れが或る婦人のいふ事を信用したもんだあら

口と心と違ふ人は世間に數多ありますから言ばありでは信用の



出来ないことがあります

◎第七十四譚 二人の旅行者と斧

愆七と強八の二人が連達て或る所へ旅をする途中で愆七は「ナイ強さん己の斧を拾つた」と云ふと強八憤怒を發て「愆七汝は愆の深い奴ダ斯やつて二人で旅をして居りやア汝が拾つても二人の物だから己ハ斯々ダと言はねばなるまい、其斧は二人の物ダゼ」と言ひますと愆七は「己が拾つたから己のだ」と争ひながら歩つて居りますと僅か道程の小半丁も行くか行かないうちに其斧の所持主が追駈けて來て「ヤイ盜賊メ何を仕やアがつた」と散々に罵りまゝたスルト愆七は大きに狼狽へ「己達の失敗だ」といふを強八ハ聞咎め「オット己達と言てもらうめへぜ己れと言て呉へ何故と言ひねへ汝ハ己れが拾つたから己れのダと言つたじやアねへか災難のか、つた時ばかり連坐に」

やうどはおくがふてへぜ

利益のあつたとき獨りで占めやうとすると難儀のか、つた時も獨りで引受けねばなりません

◎第七十五譚 老人と死神

或る薪賣の老爺が毎日荷を擔ひで市を賣て歩きまゝたが有一日午過まてか、つて一束も賣ないのでヤケを起し途中で荷を下ろし其上に腰をかけて「ア、斯な苦辛思ひをするくらいなら死ぬ方がまゝだアア死たいものだ」と獨言を云て居ますと死神が眼の前にヒウドロドロと顯れて「私に何か用があるか死たくばサア私に隨て來い」といひますから薪賣は仰天して「マア、眞平御免下さりませ薪を脊負て今迄の通り苦勞をしましても生きて居る方が宜う御座ひます  
苦しいことがあると死たいと言ふのは世間での口癖でございま



すがサア死ねといふと後へ引込みます斯な口癖は悪いことのでございませす

◎第七十六譚 水を飲たがる鳩

一羽の鳩が咽が渴て水を飲たいと思つて居ますと或る店の看板に水を入れた盃の繪が畫であるのを眞實の水と見違へ何の思慮もなく一目散に翔飛で來ますと忽ち其看板に突當り嘴を折り翼を痛め眼を廻して地に落まつたから通りかゝりの人の手は好い獲物と難なく捕へて行きまゝした

性急なことをすると、つい仕損するものでございませす

◎第七十七譚 福神を賣る人

或る人が福神の像を造へ人に賣らうと思ひまゝたが容易買人が付かないところから其像を店頭へ飜立て「コレハ尊き福神で志望のまゝ

に寶物をお授け下さる福神でござい金満家になりたいお方は此像をお買なさい」と大聲で効能を述べて居ますと通かゝつた或人が「ナイ汝は何故其像をお賣りだ汝の言ふ通の御利益があるなら其福神さまを祈て福を授かる方が宜いじやないか」と云ひますと「イエ私極々の貧乏で目下困却て居るのだから此福神さまがゆるく福をお授け下さるのを待て居ることが出來ないのです

後日の百圓より今日五十圓の道でございませす

◎第七十八譚 鼠と鼯の戦争

或時鼠と鼯が戦争を致まつたが幾度戦つても鼯が勝利で鼠が敗軍となりまゝしたそこで、鼠共が考へますに斯屢々敗軍になるのは進退の命令をする指揮官がないからだ先づ其の指揮官を擇ぶが宜からうと其の中の智者と呼べる、老鼠を選んで衆鼠の進退を任せること致



しましたソコデ今度ころへ鮎軍を微塵に破らねばならぬと早速鮎の方へ開戦のことを言ひ送り大將は成丈け立派の装飾をして彼れが鼠の大將だと敵にも見分るやうにするが宜からうとの事で立派に打拵悠々と押出しましたソコデ双方入亂れて戦ひますと今度も鼠方が大敗此で衆鼠は我れ一と穴の内へ逃込み大將鼠も最早叶はじと穴の内へ駆け込まうと志ますと身体中の飾りが邪魔にあつて狼狽て居るところをトウ〜生捕にされました

◎第七十九譚

獅子王の管轄

或地方にて諸獸の王と敬めらるゝ獅子王に至つて温良く領内に仁政を施こしますので諸獸へ何れも歸腹して居りましたスルト王へ一日布告を出しまして諸獸のこらず出廳のうへ永久互ひに親睦すべとの盟約を爲せよとの事でございますから狼も子羊も豹も山羊仔

も虎も鹿も犬も兎も出頭して其約束を致しました其時兎は殊の外大喜悦で「私共は如何して如斯嬉しい難有い御代に主れましたらう私共の様な弱いものでも強ひものゝ傍に居ても少くも恐怖いことのないとは

弱い者も強い者も權利を平等です

◎第八十譚

太子と畫獅子

或る國の王が武事の演習を好き給へる一人の太子をもち給ひ〜が或る夜の夢に此太子が獅子に喰はれ給ふと見て夢へ覺ま〜たソコデ王は夢へ眞實を証するものなればと殊の外御氣に掛けさせられ此うへへ太子の外出を止るの外なくと新たに美麗なる離宮を建させ給ひて御慰のためにあらゆる動物の繪を四方の壁に畫かせられ太子を此離宮に閉籠めおかれま〜た、スルト御年若き太子へ離宮のうち鬱々



と物憂き時日を送り給ひ壁間に畫きたる獅子に子圖御眼を着けられこれに向ひて「オ、獅子ヨ汝ハ憎き奴かな汝は我父君の御夢に入り我を喰うと見せまいらせしゆあ慈悲深き我父君ハ我を婦女子の様に此宮殿に閉込め給ひしぞや如何して呉るか見て居よ」と此畫獅子を歐んとて薔薇の枝を折取らんと仕給ふ折り御指を其刺にさされ給ひ痛み甚だしく夫より床に臥き給ひしが遂に破傷風の症となり幾日も經ぬうち此世を薨去れました

◎第八十一譚 母猿と子猿

或る猿が双兒を生み其一疋の子猿を至て寵愛するに引換へ今ま一疋の子猿を大層に憎みましたヌルト其寵愛した方ハやがて病氣に冒され程かく死亡まして其惡まれて居た方は養育法が悪いのに還て健かに生長しました

何事でも餘り精神を費ひ過ますと失敗ることがございます

◎第八十二譚 生擒に遭ふた鷺

不幸な鷺が或る人に生擒られ其羽翼を切られて園内に遊んで居る家禽の群中へ放されました鷺ハ從來の通り羽翼をのばして天空を飛ぶこともならず羽翼の弱ひ下鶏の類と日月を送るのを悲しく思つて居ますと其近隣の人が此鷺を譲受け日々養育して從來の通り空中を翔迴やうにして放してやりました鷺を大層悦びましてやがて一羽の兎を捕て恩人に贈りますと或る狐がこれを見て「其様に羽翼を延ばして呉れた人に兎なんぞを與るくらいから汝が以前の主人に恩を報すが宜いさうすると復た汝を生擒にして汝の羽翼を剪み取るだらうか

◎第八十三譚 農夫と狐



或る農夫が度々自分の飼鶏を狐に奪取まそので何んでも彼奴を捕らへて復讐をしてやらんと思ひどうく其狐を生禽にしましたから麻屑を油に浸して尻尾に結付け火の燃へて居る中へ追放しますと狐は苦辛まぎれに其農夫の所有畑へ飛込み散々に荒れまわりました時節は丁度小麥の收穫時狐に荒された、め收額は見込んで居た半分にも足りませんでした

復讐も反討と云ふことが度々あります

◎第八十四譚 獵夫と樵夫

或る武士が一日獅子獵をして見たいと出かけ漸々深山に入込むと途中で樵夫に行遇ひました其處で武士は宛も威猛に「コリヤ、汝は獅子の歩行た跡を見やア志ないか獅子の洞穴を知つて居るか知て居るなら教へろ己れが獅子を生擒にして見せやう」と言ひますと樵

夫は腰をかいて「へい、尊公、私と相伴にお出でなされば獅子をお見申ませう」と云ひますと武士は急ぎ顔色が變はり身体を震はしかがら「夫れはマアかたじけない志か、私に獅子の痕跡を探して居るので獅子を獵るのではない

何んでも實際にみると人の腹中が解ります

◎第八十五譚 橄欖樹と無花果樹

橄欖の樹が近處の無花果樹にむかひ「ナイ無花さん、已達は秋が來ても冬になつても此通り緑々として居て何時も色合の變ると云ふことはあいが汝の葉の色は緑い時があるかと思ふと又た赤色になつたり少く風が吹くと散て仕舞ふが一向心の解らないお方じやなア」と嘲笑ひますと無花果樹は何の返答もせず居ましたか或る時大雪が降て來て橄欖の葉に積つて其重量でトウ、枝が折ましたソコデ無花



果樹の橄欖の樹にむかひ「何です雪が降ると御難儀でせう私に此様  
時の用意は寒さに向ふと葉を振ふのです

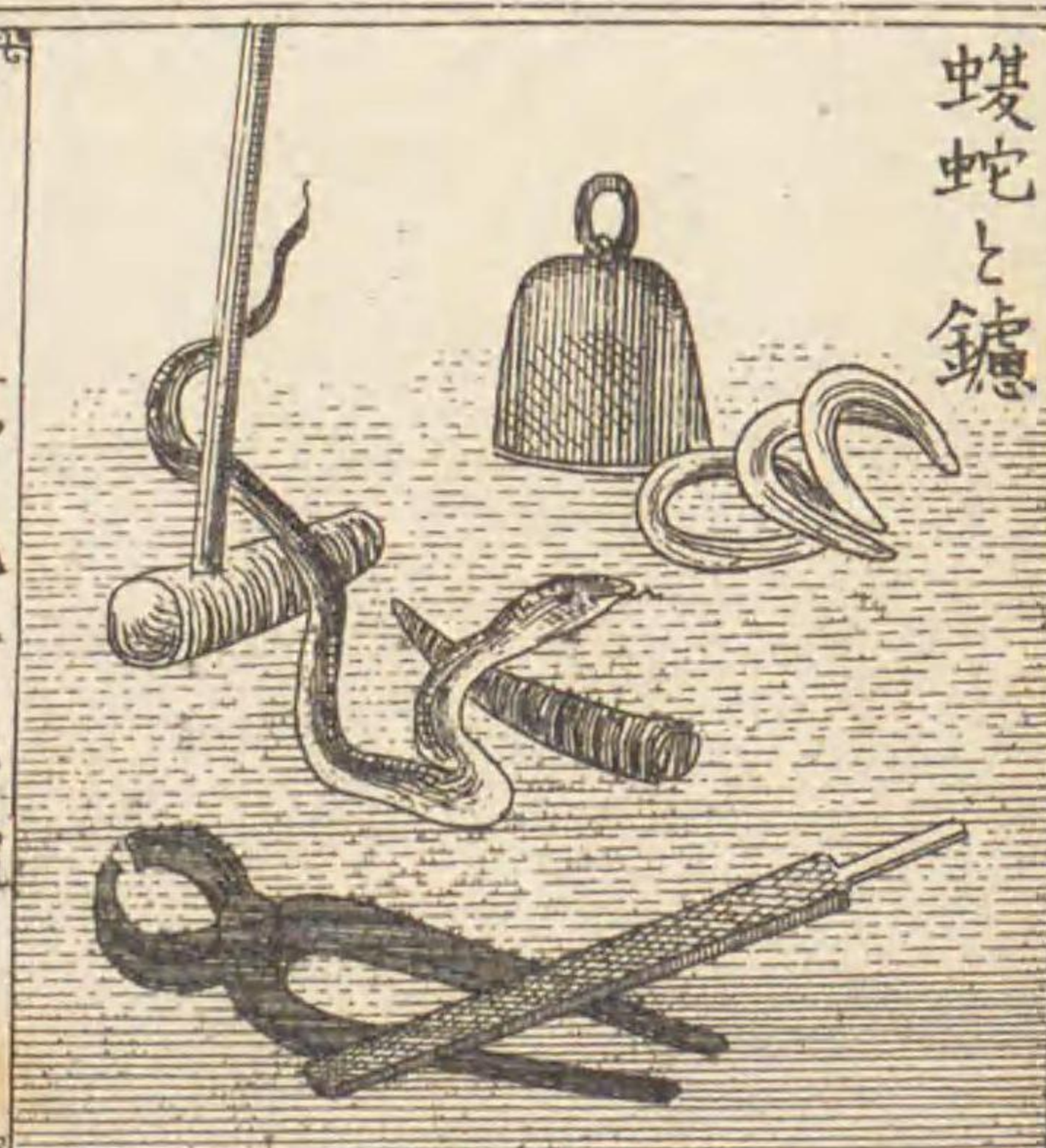
◎第八十六譚 二個の過失囊

或る古語に「人は誰でも二個の囊を首に掛けて生れます」といふこと  
があります其囊は何か入れてあるかと聞いて見ますと一個の方に  
は近鄰の人々の過失が入れてあつて夫を頸の前にかけ又た一個の方  
には自分の過失が入れてあつて其を頸の後に掛けて居るのです夫だ  
から近鄰の人の過失は能く見えますが自己の過失は見えません  
人の過失を彼此評判するより自分で過失のあいやうに注意  
るのが肝要でございます

◎第八十七譚 蝮蛇と鑢

或る時蝮蛇が鍛冶の店にのたくりこみ其處にある諸道具に向ひ「何

第八十七譚



蝮蛇と鑢

第九十二譚



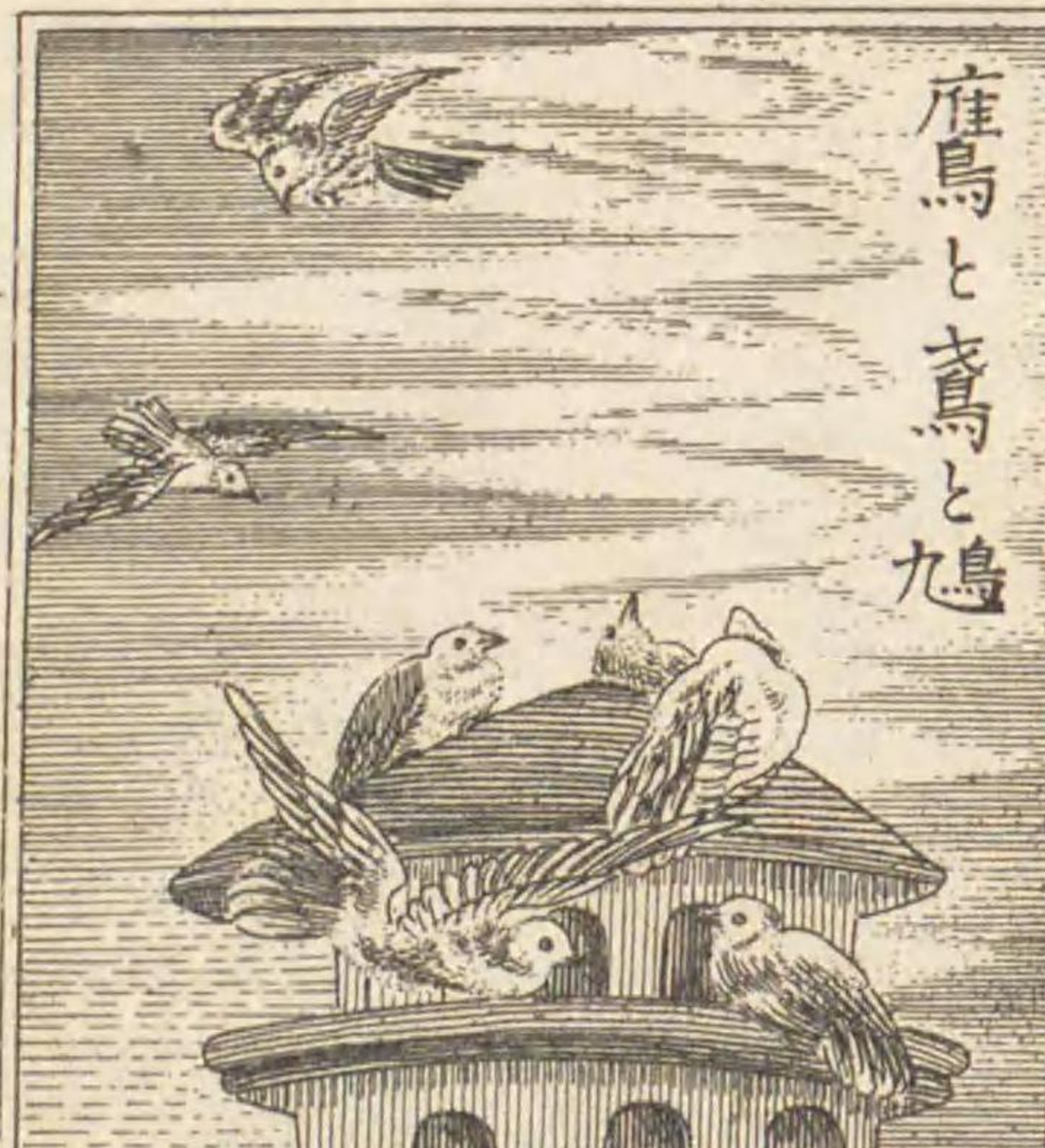
猫と鶏

第九十五譚



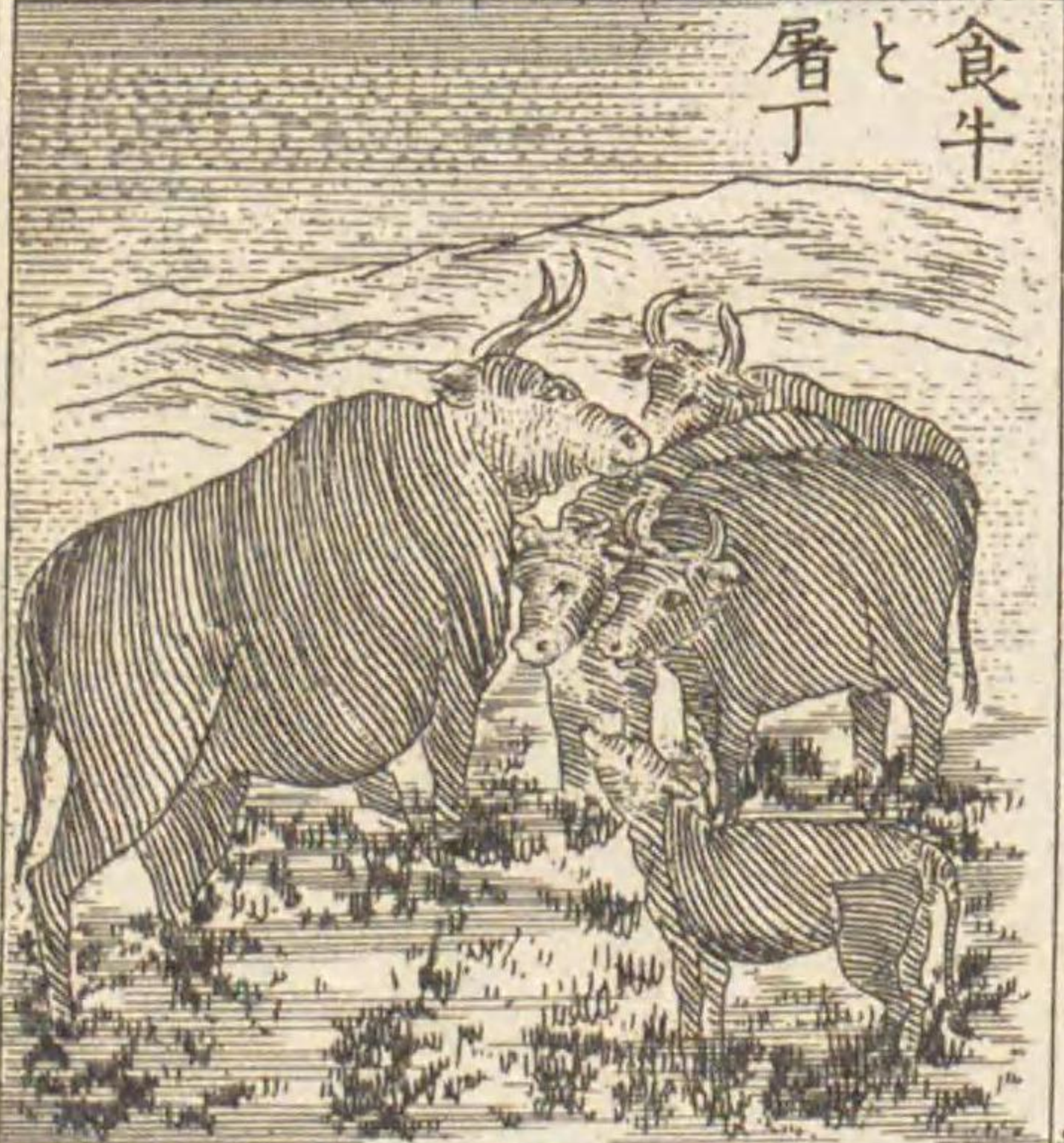
牧羊者と狼

第九十九譚



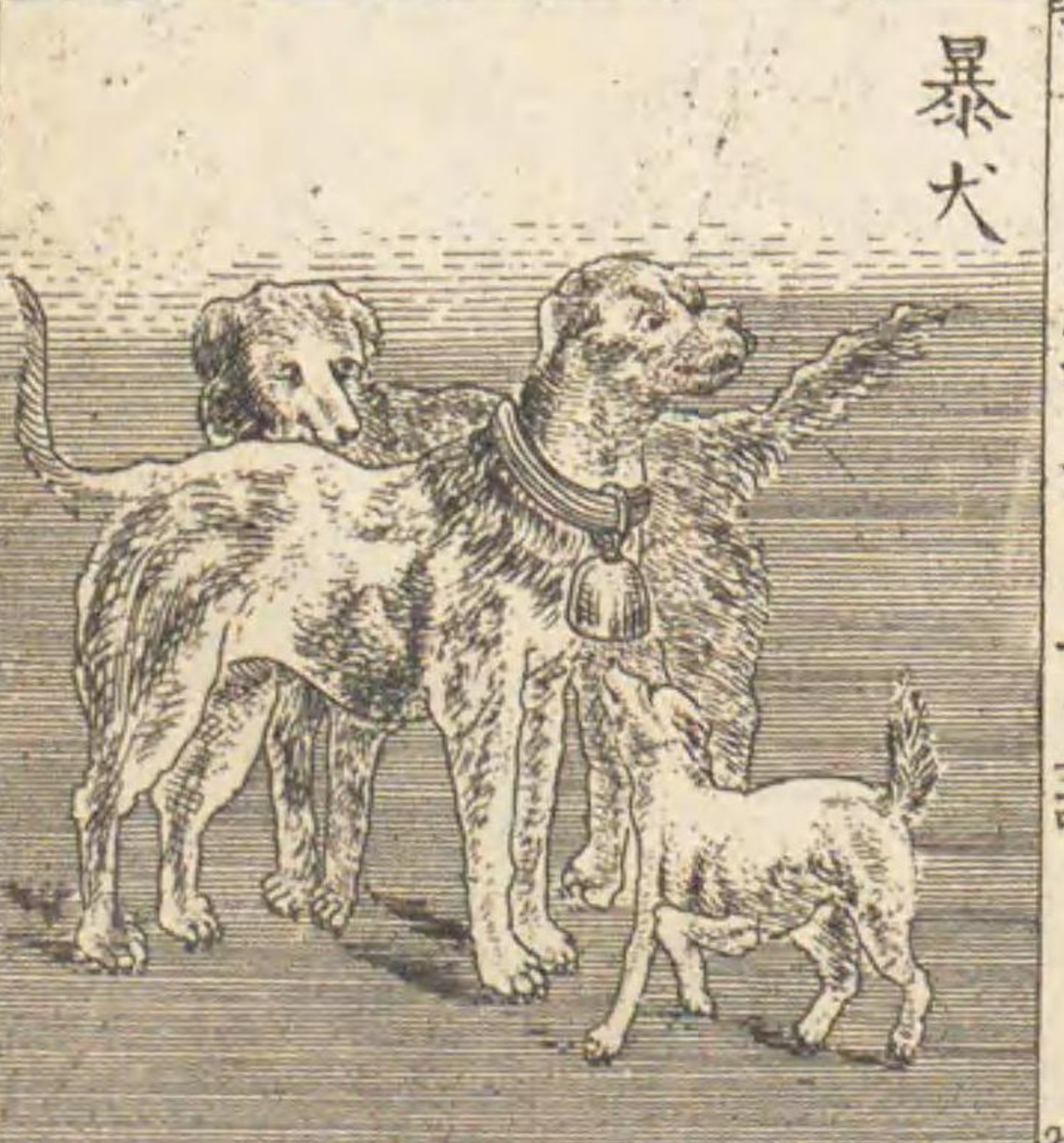
鷹と鶴

第一百九譚



食牛と屠丁

第一百十譚



暴犬



か食物を與て下さらぬか」と頼んでも誰も返事をしませんが、鑪に  
 むかひ別段に其由を頼みますと鑪は「汝は餘程馬鹿なお方だ他の者  
 は摺り取つても他には何も與らない私に其様ことを頼みなさるから

◎第八十八譚 金満家と柔皮商

或る金満家が或る柔皮商の近處に轉宅して來ますと柔皮の息氣が  
 て我慢にも居られせんソコで金満家の黄金の威光で柔皮商へ轉居  
 を頼みますと柔皮商「イヤ明日はイヤ明日はイヤ明日は追々轉宅を延引  
 して月日を送る中金満家いつか其臭氣に馴れて其催促をうかいや  
 うになりまうた

習慣は第二の天性と申すのは此處でございます

◎第八十九譚 犬と兎

或る獵犬が小山の近邊で兎を捕へ已に食殺さうと致しまうたがイヤ



イヤと思ひ直し又友達と遊んで居るやうに兎は詔諛を始めました、  
 うこで兎は「何卒ワンさん汝の本心をあらはしては貰はれませんか  
 汝は私の朋友かと思へば又敵のやうにも見え如何も汝の真心が解り  
 ません

◎第九十譚

野牛と女獅子と猪獵夫

或る野牛が獅子の兒の寝て居るのを見付け角で衝殺しますと女獅子  
 が駈けて来て「ア、不憫なことをした私の兒は野牛めの角で衝殺さ  
 れた」と歎息して居ますと其處を通りかゝつた猪獵夫が女獅子の悲  
 んで居るのを見て少し距離た所から「ナイ、女獅子殿汝の爲めに  
 兒を殺されて悲んで居る人が世間には幾許あるか好く考へて見な  
 人を奪殺す猛獸でも我子を失ふと悲しいものと見えます

◎第九十一譚

駱駝

人が初めて駱駝を見た時に大きな形體をしてゐるから喫驚して逃  
 げましたが暫時すると駱駝の性質は溫柔いと云ふことが了解して近寄  
 るぐらゐなこと何とも思はないやうになると又た此動物の精神に  
 不具いところがあると云ふを知りましたのでサア人類は馬鹿にして  
 其口へ手綱を付て小兒に追はせるやうにかりました

人も身體が大きいからと云て恐れるには及びません

◎第九十二譚

猫と鶏

或る猫が鶏を捕て「此奴を食ふにも何が道理を付て遣りたいと思案  
 を考へて「汝は毎朝早くから奴鳴り立て、人の眠りを覺すから人  
 間の防害をする奴ダナ」と責めますと鶏は「イエ、其れは貴君のお  
 言詞とも思はれませんが私が毎朝早くから鳴きますゆゑ人々が朝寢を  
 志ないで皆なそれく仕事に掛り人間の爲めに少しも防害になら



ないで巨大な利益になります」と答へますと猫は「假令汝が都合の好い辨解をしても己の食はずに居られないぞ」と到頭食つて仕舞ひました

人間にも此の猫のやうな奴が間々あります

◎第九十三譚 蟹と狐

或る蟹が住み慣れた濱邊を見捨て、其近邊の牧場へ這込み此處を己の居住に定めやうと尻を据へて居ますと狐が来てツイジ見慣れない小さな奴が饑たる時に食を擇ばずだドレ食てやらうかと口を出しますと蟹へ哀れな聲で「私が斯うなるのは當然だ私の性質と云ひ習慣と云ひ海邊に居る譯だのに如何な用事があつて陸に住はうといふ氣になつたか自分でも解らない

何事も天運に任して満足してゐれば幸福を得るものです

◎第九十四譚 二疋の蛙

二疋の蛙が近處同士の住居でありましたが都合があつて一疋は人目にかゝらぬ片田舎の深い池に住替をなす一疋の方は相變らず水も充分にない大道を横切つた小溝に住で居ました其住替をした蛙が「汝も私の居る池へ御出なさい夫はく人の目に付く憂もなし食物も澤山あるから誠に安心です斯く小溝に居ては如何な災難があるかも知れませんが」と意見をしますと「御親切は難有道理だが如何も住なれた所は動き憎いものです」と折角の意見に従きませんでした其後二三日経つと大きな荷車が小溝のうへを通越し其蛙は輪に敷れて死ました

頑固なもの、害に遭ふのは自分から求めるのです

◎第九十五譚 羊牧者と狼



羊を飼てある牧場の近邊に永らく徘徊て居た狼がありまゝたが羊に目をかけるやうな様子もなく至て正直ものゝやうに見えまゝたが、牧羊者は油断せず此方の敵だと思つて注意て居まゝたが此狼が此邊を徘徊出してから最早日數も多く過ちますので羊の朋友のやうになり敵と思つたのは此方の僻心かと思ふほどになりまゝた、ソコデ一日牧羊者は何か用事が出来て市街へ行かねばならぬことになりまゝたから此狼に羊の守護を頼んで出かけ、やがて歸て見ると羊は大半取殺されて居たので牧羊者は大きに驚き「ア、己の愚な男だ何故狼に羊の守護を頼んだか知らん

極々親友の交際をして中には敵のやうな心を持って居る人があ  
ります

第九十六譚

腹と支脈

或る時支脈目口鼻耳共が集會を開きまゝて我々は腹の飢らないやう  
に日夜働いて居るが腹は我々が仕送り食物を食うのみで、謝儀の一  
ツも仕様とはせず好い氣になつて贅澤をきめてゐるゝら懲めの爲め  
今日限り働を止めて腹の乾あがるやうにして遣らうと評議を極ま  
たソコデ足は一步も歩行す目ハ物を見やうともせず手は箸を取らう  
ともせず口も齒も鼻も耳も皆な怠惰て居まゝたがサテ夫から二三日  
經ち腹が飢渴て來ると四肢五管が皆な衰弱ツたところから「ア、我  
々が從來働いて居たのは何も腹の爲めばかりじやアなかつた矢張り我  
々の爲めだナア」と始めて四肢五管が後悔をしまゝた

第九十七譚

鴉と蛇

或鴉が空腹になつて何か食物はおいかと樹の枝から下を、ながめま  
すと日向に蟠まつてスヤ〜眠て居る蛇が居りますので直ぐと飛下



りて攫去はうと志ますと蛇の眼を覺し「誰れだ己れを喫驚させたの  
 へ」と言ひながら突然鴉に卷着てキリキリと締つけましたから鴉は  
 氣息も絶へくりに苦しい聲を出して「吾は生るためにお前を食はう  
 としたのには是が死ぬ基となつたか私ほど不幸なものはない  
 暑中かどに咽喉が渴て來るとガブグブ水を呑む見達があります  
 が一時の渴を止めても夫が病氣の基因になることがありますか  
 ら用心をせねばなりませんぬ

◎第九十八譚

猫と愛神

或る猫が或る美男子に戀慕して何卒して彼の人の嫁になりたいたいと思つ  
 て愛神に願を掛け「私は猫の形態でございしますが少く望みの筋がご  
 ざいますゆゑ何卒婦人の形態にお替へ下さりませ」と願ますと愛神  
 早速猫の願ひを許し美しい婦人の容姿に變られました、さうすると

兼て戀慕をかけて居る美男子の方からも懸想して婚姻の相談もまど  
 まり思ひのまゝに夫婦になりました、うここで愛神が熟々と此花嫁の  
 有様を御覽になりますと少くも猫の素振はなく何見ても人間でござ  
 いますから其食物も替つたか如何だか試して見んと鼠一疋を部屋の中  
 へ追込まれますと此花嫁の忽ち猫の性質をあらわし其鼠を捕り食  
 はんと追駈けました、うここで愛神の形容ばかり人間でも心が變らな  
 いでは無益だと復た元來の猫になされました  
 美しい婦人と見れても心の猫のやうな人があります

◎第九十九譚

鷹と鳶と鳩

或る堂宇の屋根に住居をして居る鳩共が鳶の威勢に怖れ鷹にむかひ  
 「彼の鳶めへ恐ろしい鳥ですから若く彼奴等が私共を苛虐める様な  
 ことがありましたら何卒御加勢を頼みます」と言ひますと鷹は早速



承知せうちしよまうた、ところで鳩はと共どもは皆みなく大喜おほよろこび悦こがて自分じぶん共どもの部屋へやへ鷹たかを案あん内ないくますと鳶とびが一年いっねん中ちゆうに捕とり殺ころすよりも多おほくの鳩はとを一日いちにちに捕とり殺ころすま

◎ 第 百 譚 牝 鷄 と 燕 子

牝めんどり鷄どりが蝮まむし蛇しの卵たまごと知しらず暖あたためて居おりますと蝮まむし蛇しの子こが孵ひりまうた其その時とき燕つばめ子めが牝めんどり鷄どりの所しよ爲わざを見みて「汝おまへハマア何かんと馬ば鹿かなお方かたぢやないか如ごと斯しも蝮まむし蛇しの卵たまごを孵ひして此こ奴やつら等らが生おほ長きくなると最いちばん初はつに汝おまへを喰く殺ころすの

世よには此この牝めんどり鷄どりのやうな不ふ便べんのひとが間ま々まありま

◎ 第 百 一 譚 盜 賊 と 鷄

盜とう賊ぞくが或ある家うちへ忍しのび入いりまうて何なにか價やうち値ちのある品しな物ものはないかと探さがて見みると是これと云いふものはなく鷄にせどりが時ときの隅すみに蹲うづ踞くまつて居おるのを見みて「

エー貧ひん乏ぼうな家うちだなア先まづ是これでも掠どつて行ゆうかと鷄にせどりを盜ぬんで我わが家やへ歸かへり腹はらが飢へつて來きた此この鷄どりでも食くはうかと絞しめ殺ころすにかゝると鷄にせどりハ「私わたくしは人にん間げんの爲ためには益やくになるものでございませう私わたくしハ早はやくから人ひとを起おこして仕し事ごとをさせ人ひとに金かね儲せけをさせませう」と言いひますと盜とう賊ぞくは「うれだから已おれが汝おまへを殺ころすのだ汝おまへが人ひとの目めを覺おぼすと已おれは仕し事ごとを止やめねばならぬから

善よい事ことをするもの、防か禦せになるものハ惡わる事ことをするもの、爲ためには敵てきでございませう

◎ 第 百 二 譚 乘 馬 と 驢 馬

或ある驢ろ馬ばが重おも貨にを脊せ負あふて蹇こく歩あるいて居おますと一いっ頭びきの乘ちやう馬めが華きれ麗いな馬ば具ぐをつけて駸きんと遣やつて來きて「ヤイ邪よ廣まになるはハ脇わきへよれ、ぐずぐずぐとと此この蹄つめで蹴け殺ころすぞ」と奴やつら鳴なりつけまうた驢ろ馬ばハ何なんの返へん事ごともせ



ず脇へよけて馬を通りまゝたがサテ其後軍でもあつたものか此乗馬  
 へ重傷を受け不具になつて農家へ賣つけられ重い荷車を挽て来るを  
 件の驢馬が見て何でも彼馬へ見たことがあるとつくづく考へ「サウ  
 ダ彼馬へ先頃己を怒鳴つけた奴だオイ」高慢者め日外のやうに威張  
 れるなら威張つて見ねへ其の見苦しい風体を見ても己へれ氣の毒と  
 へ思はねへヨ

榮枯盛衰のをかられぬものでございます

◎第百三譚 旅人と運命の女神

或る旅人が長途をして疲勞が出て一休息をやうと或る井戸の邊の小  
 石の上に腰をかけツイ浮々と仮睡まゝたが一つ寢返りを打てば井戸  
 の中へ陥込ふと云ふ危険ところで運命を守る女神が顯はれ「旅人ヨ  
 く眼を醒ささいか起ろく若し汝が此井戸の中へ陥込むと人類社

會で我の守護が足りないとか何とか言て我を悪く言ふだらう全体  
 人へ我儘なもので難儀なことがあると自分の不注意へ棚へ上げて皆  
 な吾の罪だと思つて居るから

人の幸福と不幸福とハ孰らも自分で招くのでございます

◎第百四譚 二疋の蛙の移住

或る二疋の蛙が小さな池に合宿をして居まゝたが夏の早魃で水が悉  
 皆涸りまゝたため互相談をして他へ移轉の支度を調へ出かけた途中で  
 古井戸を見付け一疋の蛙が内を覗きこみ「コレハ如何にも好さうな  
 井戸だ水も食物も澤山ありさうに見ゆるこれを御同様の住居にし  
 せう」といへば友蛙の用心をして「若し此水が悪かつた時に如何な  
 さる如斯深いところから復たと出ることハ出来ないぜ

何でも理非善惡の見とぼしが付かないうち先くせぬ方が勝



利でございます

◎ 第五百譚

鹿と羊と狼

或時鹿が羊にむかひ「羊さん何んど憚りだが麥を一升借して下さるまいか最も其証獸に狼どのを頼みますから」といふと羊の若く誰かられぬ志あるかと暫時考へ「狼の何んでも物の要るときは構はず他の物を攫去て行く癖があるテ又た足下の競走をする脚が長いから中々我に及びません而みると返濟の期限が來ても本獸も証獸も我の手にのらないテ

黒いものが二ツ集つたので白いものになりませぬ

◎ 第六百六譚

猫と鳥

或る鳥が病氣に罹つて鳥檻に惱んで居ますと或る猫が醫師の衣服を着て杖を携へ治療具箱を小猫に持せ鳥檻へ遣て來て病鳥の同居鳥に

むかひ「貴君の嘸ぞ御心配で御座らう誰れか好い醫師にでもお見えなすつたか、なんなら私が藥の御指揮をして直に治療してあげませう決して御遠慮に及びません」と言ひますと同居の鳥「誠に御親切の段に難有う御座います、志か私共をはじめ病鳥に如何しても貴君の御構ひ下さらぬのが最大好う御座います

我方の不幸の敵の幸福でございます

◎ 第七百七譚

雀と兎

或る時兎が鷺に攫まれて苦しまぎれに泣出しますと傍に居た雀が兎を馬鹿にして「兎殿汝の足は日頃快走といふことだが斯な時に遅いものだナア」と笑つて居ました迂濶して居る隙を窺ひ不意に鷹が來て此の雀を攫みました其時兎の鷺の鋭ひ爪を逃れ一命を拾つて大息を吐きながら「私の難儀な目に遭て居るのを見て雀踊をして喜



んで居たから自分も其様難儀な目に遭ふのハ當然の理デアー  
人の憂を悦びますと人もまた我の憂を悦びますから人の憂ハ我  
が憂と思ねばなりません

◎ 第一百八 譚 敵 同 士 の 人

敵 同 士 の 人 が 或 時 同 船 を し ま す と 双 方 と も 傍 に 居 て い な ら ぬ と 一  
人 の 船 尾 の 方 へ 一 人 の 船 首 の 方 へ 坐 り ま し た 、 ち こ こ で 船 が 海 岸 を 離  
れて 大 洋 へ 出 ます と 生 憎 颶 風 が 吹 て 來 て 今 に も 船 が 覆 へ り さ う に な  
り ます と 船 尾 に 居 る 一 人 が 水 夫 に む か ひ 「 何 と 船 へ 今 に も 沈 没 さ  
う が 船 首 と 船 尾 の 孰 が 先 き だ ら う 」 と 尋 ね ます と 水 夫 「 私 の 考 へ  
だ と 先 船 首 の 方 が 先 き だ ら う 」 と 答 へ ま し た 、 ス ル ト 船 尾 に 居 る 人  
ハ 嬉 し さ う な 顔 つ き で 「 左 様 だ け 夫 夫 なら ば 私 死 ん で も 悲 しく  
あ り ませ ん 敵 の 死 ぬ の を 見 て 居 る こ と が 出 來 ます か ら 」

敵 同 士 の 心 の 恐 ろ し い も の で ござ い ます

◎ 第一百九 譚 食 牛 と 屠 丁

或 時 食 牛 共 が 集 會 を 催 け て 「 我 々 を 殺 す の は 彼 の 屠 丁 共 だ か ら 彼  
奴 等 を 残 ら ず 殺 し て や ら う で い な い か 」 と 相 談 を つ け 何 時 何 日 と い  
ふ 定 め の 日 に あり ます と 數 多 の 牛 が 角 を 研 す ま し て 出 て 來 ま し た 其  
時 永 ら く 田 畑 に 遣 は れ た 百 性 牛 が 一 成 程 我 々 を 殺 す の へ 彼 の 屠 丁 共  
に 違 い ない ま か 彼 奴 等 我 々 を 手 際 に 殺 ろ し て 呉 れ る か ら 死 ぬ に  
も 苦 痛 を し ない が 今 ま 彼 奴 等 を 殺 し て 仕 舞 ふ と 又 た 下 手 な 屠 丁 の 手  
に 掛 ら ね ば なら ぬ さ う する と 二 重 死 を する 苦 痛 に 遭 ふ ぜ 假 令 屠 丁 が  
居 ない か ら っ て 人 が 食 牛 を 食 は ず に 居 ない か ら

◎ 第一百十 譚 暴 犬

或 人 が 飼 居 る 犬 は 世 に 云 ふ 暴 犬 で ござ い ま し て 誰 で も 彼 で も 行



當り次第囓付きますから主人へ其頸環へ鈴をつけ人が用心をするやうにして置ますと此暴犬は鈴を付けられたのを自慢らしくがらう鳴らして街中を威張って歩きまわると年老た獵犬が「何故汝は斯んなものを人に見せ歩行て居るのダ汝は是れを賞牌ダと思つて居るか知らないが私の考へでは汝が暴犬だから各人に除けると云ふ標につけた耻辱牌だぜ

世間には耻辱になることを名譽の様に考へて居る人が随分多くあります

◎第百十一譚 旅人と犬

或る人が旅行をせんとて其準備に忙しがって居りますと戸口が愛犬がボンヤリとして立て居るを見て「汝は何んで欠伸して居るのだ準備の出来ないのハ汝ばかりダゼ」と言ふと愛犬は尾を掉りながら「私

は最前から準備が出来て主公を待て居ますのダ

遅緩した人が動もすると敏捷い人の延引を責めます

◎策百十二譚 牝鹿と獅子

獵師に追駈けられた牡鹿が命からく洞穴へ逃げ込みますと是れは獅子の住居でありましたが獅子は牝鹿を見ぬ風体をして小隅に潜んで居ましたので牝鹿は少くも氣が付かず「ヤレ」是で安心ダと腰をすへて息休みをした末徐々出かけますと獅子は時分を圖り後ろから飛かゝり「是れシタバタするかへ」牝鹿ハ仰天して震へながら「私は何した果痴だらう漸々獵夫を逃れたと思つたら又た恐ろしい獸の住居へ飛込んで居タ

小害を避けんとて大害を受ける事がありますよくく注意ねばなりません



◎ 第一百十三譚

驢馬と牧者

或日驢馬が牧場で草を食つて居ますと牧者は其番をして大屈さうに四方をながめて居るうち俄然鬨聲が起つて敵が攻寄せるやうすゆゑ牧者は喫驚して「サア逃るのだぐずくすると我も汝も敵の囚俘になるぞ」と言ひますと驢馬へ緩慢た風体で「旦那何故私も逃げなければならぬのです主公は敵が私を奪つたら從來より二倍の荷物でも負はされは志まいかと夫を案じて下さるのか」と奇妙なる返事を志たから牧者もチと言ひ方に困り「ナニさうでもないのサ」と能加減の返答をしますと驢馬は沈着切て「夫れじやア私は相當の荷物を負うとさへ思つて居れば誰れに使はれても差支へありません

◎ 第一百十四譚

禿頭翁と蠅

一疋の蠅が禿頭翁の頭にとまりチヨイと嘗一嘗試ると翁は手を擧げてピシヤリと敲きまゝた其時蠅へ敏捷く手の下を潜りぬけて耳の端にとまり「旦那此處ですよ貴君は私のやうな小さい虫がチヨイと嘗めて試たのに憤怒を發て私を殺さうとまで思つて自分で自分の頭をピシヤリとやらかして痛い思ひをなされるとはハテ如何したもので御座います」と冷笑しますと翁は益々「焦燥ちイヤ乃公の頭と乃公の手は容易に和睦が出来るワイ何故と言は、頭に痛い思ひをさせやうと思つて敲たのではないから、志かゝ人の體を嘗めて歡んで居るやうな賤ひ穢ない蟲は假令頭に如何様な重い罰が來ても殺してやるのが乃公の本望だ

敵を殺さうとするものは幾分は自分にも害を受ける覺悟でござ  
います

◎ 第一百十五譚

醫師に化れた補鞋匠



或る補鞋匠が日々労働て居ても思ふやうに錢の取れぬところから自分の顔を知つたものゝない市街に往き藥劑の調合をはじめ醫師を氣取つて是れの中毒に莫大の効驗がある解毒劑だと言つて或る藥を賣て一時は大評判を博まつたが此補鞋匠が程なく重病に罹つて臥床ますと兼て此市街の支配人は此奴は何のくらの醫術に巧者だか試して見んと思つて居たところゆゑ一日尋ねて來て容体を問ひ素知らぬ風体にて茶碗に一杯水を入れ是れは補鞋匠の調合した解毒劑と毒とを交混たものぢやが之を飲だら褒美を出しませうとて飲ませにかゝりますと補鞋匠の命に換られないと思ひ「私は醫道は少くも存じませんが痴呆な人々が私の事を色々と評判して高名あつたのでございた汝達にはマア如何して斯な愚痴なことが出來ます足部に穿く靴の

補綴もせない人に汝達の大切な頭部を任すとは馬鹿にも程のあつた事だ

◎第百十六譚

獵師と騎馬武者

或る獵師が一羽の兎を捕て肩にかけ歸て來る途中で騎馬武者に出會ますと其武者は獵師に向ひ「拙者は其兎を買いたいが無理ながら何卒讓つて呉まいか」と言ひますと獵師は「お好なら賣りませう」と差出すを武者は受取るや否や價を拂はずに駈出しました、そこで獵師は逃がしてなるものかと一目散に追駈ましたが一丁後れ二丁後れて最早追付く目的がなくなりますと「オーイ〜武者殿〜御待下され其兎の貴下へ進上致しますから

◎第百十七譚

犬と獅子の皮と狐

數疋の犬が獅子の皮一枚を奪合て宛も強さうに牙で散々に嚙裂て居



たどころへ通りかへつた狐がこれを見て「若く此獅子が生て居たらば汝方の牙より獅子の爪の方が餘程強いといふことを直に見せられるだらうのに  
 下居る人を蹴るは易いことでございます

◎第百十八譚 驢馬と狼

或る驢馬が牧場で草を食つて居ますと狼の來るのを見て彼奴が己を捕うと思つて居るナ一次彼奴を騙して遣らんと跛足の眞似をして居ますと狼は「驢馬さん汝は如何して跛足よおなりだへ」と尋ねました也此驢馬は不自由な風体をして「ハイ狼さんか私ハ此頃生墻の間を通らうとして足の裏に刺をたて、困つて居ます御覽じて引抜いて下さりませぬか」と足を出ますと狼は得たりと驢馬の片足を持ちあげ蹄の裏を覗き込む隙を見て驢馬は爰ぞと狼の面をつゞけさまよ蹴ちら

第百十八譚



狼 驢馬と

第百二十一譚



牧羊者と牛仔

第百二十五譚



鴉と狐

第百二十六譚



驢馬と 戦馬

第百二十九譚



醫師になつた蝦蟇

第百四十七譚



赤禿頭ノ武士



何處いづくともなく逃去にげりまゝた其時そのとき狼おおかみの歎息なげきして「ア、已おれが如斯ごとめに遭ふあのハ當然あたりまへの事ことダ已おれの親父おやぢは已おれに屠者ほろりての營業なりわいを教おしへてくれたのに醫者いしやの眞似まねをしたから

◎ 第一百十九譚 蚊と獅子

蚊かがブン／＼言いひながら獅子ししの居ゐる所ところへ來きて「私わたしは汝おまえを些少すこしも恐おそれないぞ汝おまえよりか私わたしの方が強つよいぞ汝おまえの強つよいのハ乙女おとめの喧嘩けんかをするやうに爪つめで引搔ひきかひたり齒はで嚙かみ付つたりするばかりダ切々きき言いふ様ようだが私わたしは汝おまえより餘程よほど強つよいハ其それが虚言うそなら孰どつちが勝かつかサア決鬪やりあひをして見みやう」と云いひますと獅子ししは咆哮うなり出だしサア來こいと云いふや否いなや蚊かは嘴角くちばしを尖とがらせて獅子ししの鼻はなの穴あなや顔かほの毛けのなるところを散々さんざんに刺さしまゝた、獅子ししはいよいよ／＼猛たけり出だし蚊かを一撃ひとうちに打取うちとらんと我われと我身わがみを搔裂かきさいて自分で創傷てきざを受け閉口へいこうして引込ひきこみますと蚊かは獅子ししに勝かたと云いふので凱聲かゐせきを



あげて引上げましたが其後間もなく蜘蛛の網にかゝり苦もなく餌食  
になりました其時蚊は歎息して「ア、吾れの獅子ほどの豪敵と引組  
んでも敗北はとらなかつたが蟲のうちでも下賤な蜘蛛に殺さるゝと  
はチエ、残念

大敵を見て恐れぬものゝ小敵を見ても侮りません

◎第二百二十譚 牝山羊と狼

牝山羊が何の用心もなく牧場から出て来ますと途中で狼に邂逅ひ追  
詰められて途途を失ひ詮方なく狼に向ひ御身に出會ひ妾の不運最  
早餌食となるより外に術も候はず就て今はの際に唯だ一事の願ひ  
聞入れてたび給へ妾幼き時より舞を好めり、いかで、此世の思出よ一  
曲舞はせて給はらずや御身の笛に秀で給ふかねぐ聞知りはべる  
か妾が拙き舞に合せ一曲聞給はらば此うへのことや候ふべき

と愁きますと狼も「其は面白からん我も笛の名人なれば」と笛を吹き  
出しますと俄に騒がしくなつたので獵犬へ何事かと思ひノソノ来  
て見ると狼が居りましたのでイキナリ飛かゝる狼の不意を打れ吃驚  
して逃出聴てふりかへりて牝山羊をにらみながら「ア、吾れは斯  
なことになる筈じや業体を餘所にして笛なんぞを吹て汝を面白から  
せたから

◎第二百二十一譚 牧牛者と牛仔

或る牧牛者が牛仔を失つて其行衛が見當りませんので山の神や土地  
の神に願をかけ「若く牛仔の盜賊を見付けることが出来たら御禮  
に羊一疋を奉備ませう」と誓を立て其處彼處と尋ねて小山の片端へ  
上りますと牛仔を食つて居る獅子が居たので膽を潰し戦栗をしながら  
ら上天を仰ぎ「山の神様土地の神様此災難を救はせ給へ御禮には彼



の牛仔と野牛の大きなのを供へます

●第二百二十二譚 兎と獅子

或る時諸獸が會議をはじめ兎が一番立起して宛も大議論らしく「諸君ヨ何んでも世の中は尊卑大小強弱の差別なく權利を平均しなればなりません余の説の如きは萬國の公法とも申すべきもので諸君に於ても御同意御同感と云ふことへ余が自ら信じて疑はざる所で御座います」と喋々と述べますと獅子が突然立起して會場も動くばかりの聲を出し「只今兎殿の述べられた説は一應御最と存じます、志か各位諸君は拙者の如き爪と牙を御持ちあさるか承はり度

●第二百二十三譚 驢馬と騾

或る騾丁が騾と驢馬に荷物を着て旅をしますと驢馬へ平地の間は何の苦もなく歩きますが山路へ掛りますと荷物の重みが二層倍もある

やうに思はれ脚が進みませんソコで驢馬へ思案して「何と騾太郎さん己れの荷を少し助けて下さるまいか己に歩けなくなつたヨ」と泣聲を出して頼みますが騾へ更に頓着もせず駈々と行きますうち驢馬はトウ／＼荷物の下敷にかつて斃れました、ソコで騾丁の詮方なく其場で驢馬の皮を剥ぎ荷物と皮を残らず騾に脊負せましたから二頭分の重荷となり騾へ志きりに歎息して「ア、己が悪かつた先刻驢右衛門が少し荷物を助けて呉れと言つた時ナイソレと受取て遣たら二疋前の荷物ばかりか驢太郎の皮まで脊負ふ様な苦みはあるまいに因果應報の争はれねへものだなア

●第二百二十四譚 驢馬と買人

或る人が驢馬を買取る約束をして其の持主より飼試しをした上で取極るからと暫時借受て曳歸り數頭の驢馬と一つ厩に入れ翌朝になり



往て見ますと其驢馬の平素一番横着で大食をする驢馬と友達になり  
 交情よく遊んで居りまゝたので主人の興をさまゝ早々賣主の許へ連  
 行き「先づ買入の見合せにませう」と断りますと賣主も不思議さう  
 な顔つき「大層早く飼試ゝが出来まゝた子」と云ひますからある人は  
 「イヤ造作もない事で一夜で飼試ゝが出来まゝた實は昨日から厩へ  
 入れて置ますと此の驢馬が懇意にゝた友達から其の性質が分りまゝ  
 た

人の善惡の其友から分ります

◎第二百二十五譚 鴉と狐

或る鴉が一片の肉を盗んで嘴に喰へ喬木にとまりてゆるゆる馳走に  
 ならうと思つて居ますを狐が下からチラト見付け巧妙彼鴉を騙して  
 彼の肉を取て遣りたいものだがと考へ「オヤお黒さんは其處にお出

か汝の身体の奇麗なこと其上汝のお顔色の美しいことは又た格別で  
 ス子一若し汝のお聲音が汝の身体やお顔色の様に美かつたら誰でも  
 汝の鳥の女王様だと申しますと「と教唆ますと鴉は聲だつて何も其  
 様にわるくない筈だ狐めに一ツ聞かして遣らうと思ひ一聲高くカ  
 ーと鳴ますと嘴を開た拍子に喰へて居た肉を落まゝた、狐は去てや  
 ツたりと思ひ駈よつて銜へながら「ナイお黒さん汝の聲は矢張り鴉  
 丈けの聲だが汝は大分不才子  
 ないことをあるやうに言て譽るのハ諂諛です夫を聞て歡ぶと諂  
 諛賃をとられます

◎第二百二十六譚 驢馬と戦馬

或る驢馬の戦馬が平生飼主に寵愛されて秣なども澤山に食つて荷を  
 一荷運ぶでもなく浴水をしたり髪を結つて貰たりして奇麗くして居



るのを羨ましく思ひ「ア、吾の様な不運なものはない秣の充分に食  
 いもせず朝から晩まで重荷を挽て少く遅々すると敲かれるとは如何  
 した因果か知らんと歎息をして居ました其後或る所に戦争がはじ  
 まり重い甲冑を着た兵士が其戦馬を跨て戦場へ出ますとやがて戦馬  
 の重傷を受けて絶命しました其時驢馬の戦場の苦みなど考へて「ア  
 、吾れは戦馬と云ふものは大きに樂なものダア、吾れは不幸なもの  
 ダと羨んだり歎いたりして居たが斯うなつて見ると戦馬は不幸なも  
 のダ己の方が何のくらゐる幸福かくれぬ

人も樂をする苦みが出来苦辛をする樂が出来ます樂ばかり  
 志やうと思つても爾へなりません

◎第二百二十七譚

竊柴奴と山鳥と鶏

黄昏に竊柴奴を生業にする人が野菜ばかりで晚餐を食うとてゐる

處へ圖らぬ友人が久瀧で尋ねて來ましたから酒でも出さうと考へま  
 した其日は不獵で竊柴に何んにも懼りませんソコデ是非なく囹に  
 使う山鳥でも縊めてやらんと其準備にかゝりますと山鳥が「主公、若  
 し私が死くなりましたら以來は竊柴をお掛なされた時誰れが他の鳥  
 を竊柴に呼寄せます誰れが主公に鳥を捕らせます」と云ふゆゑ竊柴  
 奴が成程彼奴の言ふ通りだ彼奴を殺めてはからんと其事は止ました  
 が何も下物がなくては酒が飲めぬと今度は時往て鶏を引出さうと  
 志ますと鶏の哀れな聲で「主公、私をお殺しなさんと主公に夜明けを  
 知らせるものがありますせん誰れが主公の生業に晩れないやうに朝  
 早くから主公を起します誰れが主公を起して曉獵を見まはらせます  
 」と口説ますと竊柴奴は「成程汝の言ふ所も最もだ汝は毎朝吾が朝寢  
 をしない様に警醒て呉れるのハ汝だ、志か、吾は訪問て來た友人と



酒を呑ねばならないと云ふ事が出来たのだ

必要の時には規則は守れぬものでございませす

◎第二百二十八譚 乗馬と磨舎業

或る乗馬が追々齡が老つて軍に出ることが出来ませんで磨舎に住  
みこみ毎日粉を挽て居りますから矢石の中を潛り抜ける危険はなく  
なりまゝたが毎日〱降ても照つても車を廻して居るのも随分樂な  
ものでないとい以前の事を思ひ出仕合の好つたのを熟々考へてトボ  
〱磨を挽きながら主人を回顧り「主公、吾は以前乗馬であつたとき  
は胸から尾に至るまで立派に馬具を着飾り磨卒は一人附切りで軍  
に出で大層働きましたたが不圖了簡が變つて來て軍に出るよりは磨舎  
業に雇はれた方が好ひといふ氣よなつたは如何した理か私には一向  
知れませせん」と云ひませと主人ハ「汝昔日の事を思ひ出して愚痴をこ

ぼすのは止しなさい運命が好くあつたり悪くなつたりするのは世の  
中の常だハ

雇人などが何んでも仕合の好くなるやうにと度々住替をするの  
は其住替をする度毎に運命を縮めて行くのです

◎第二百二十九譚 醫師になつた蝦蟇

或る蝦蟇が一度沼の中から這出て諸獸にむかひ「拙者は世界の大醫  
で御座る藥劑の調合に妙を得て居ます如何なる難病といへども私の  
診察で治癒らぬものはない私に掛て廣告の虚くからざるを知り給へ  
」と大聲で奴鳴て居ますと或る狐が此聲を聞つけ早々飛て來て「イヤ  
蝦蟇大醫先生足下は御自分の跛の歩行方や身体の皺をお治療なさる  
ことが出来ない僻になんぞママ大言が吐けますなア  
人の中よも此蝦蟇のやうな名醫がないとも言へませせん



◎第三百三十譚 猫と鷺と女猪子

或る鷺が高い榊樹の頂上に巢を造へて居ますと或る猫が恰好其幹の穴に仔を産んで居ました又た其樹の根に穴があつて其穴には女猪子が自分の仔を連れて居住をして居ました、そこで猫は自分の伎倆で其鷺や女猪子を甘く騙して其邊の食物は皆な自分の所有に去やうと思ひ或る日鷺の巢にゆき「チヨイト私はお報知に來ましたか御同様は今に危険なめに遭ひますぜ貴君も御承知の此樹の根に住居である野猪子は毎日々々此樹の根を掘て居ます夫れは如何いふ次第かと能く々々探つて見ますと此樹を倒して我々が此の喬いところから落て來るを下に居て捕殺して餌食に仕やうと云ふ心算ださうです」と充分鷺を恐怖して置いて今度の女猪子の住所を訪ね「何んどマア大變な事が出來か、つたから窺とお報知申しますすが此頂上に住居で居る鷺

は甚だ心底の好くない奴で汝の御子息などがブラ〜食物でも探しに出ると直ぐに攫去て仕舞はうと云ふ了簡で此頃は間がな隙があ其事ばかり考へて居る様子ですから少くも油断はなりませんぞ私も早く歸て成だけ外出はしないやうに仕ませう」と女猪子を騙して挨拶ろこ〜に歸りました、そこで猫は白日の間は恐怖た風体で外へ出ずに居りまして夜分になると狐鼠出かけて其の近邊の餌食を獨りでせしめて居りましたが鷺は猪子に恐れて榊の枝に止つた切り猪子は鷺に怖れて自分の住穴から少くも出ないで居ましたあら二三日するど食べる物もなくなつて、どう〜飢死をいたしました是れに引替へて猫は食物の充分あるところから贅澤な生計をして居ました

世の中には他人を苦くめて我身一人で榮華をするものが澤山あります



或る時一疋の蚊が牛の角にとまり「私は汝に問ひたいことがあつて  
 来た汝は何故其様に不幸なお方ダ子、マア其様大きな身体ではあり  
 力も強いのに人が如何なことを仕向ても何の口答もせず奴隷の取扱  
 を受けて居なさるのは如何いふ了簡ダエ私は汝と違つて斯な小さな  
 動物だけれと思ふ存分に人の肉を嘗めたり血を吸たりして遣ります  
 」と牛の了簡を尋ねながら自分の活計を譽めますと牛は「私は恩を受  
 たのを忘れないのが本望でございます私は人々に可愛がられて食物  
 も澤山貰ひ私の頭や肩を輕打てくれ人々に敬つて事へます」と答へ  
 ました其時蚊は歎息して「オヤマア左様ですか私は汝がお好のやう  
 に頭や肩を輕打れたら其時こそ私の運命の盡頭でス  
 自分を愛する人を喜ぶのは當然の事です

◎第三百三十一譚 蚊と牛

海豚と鯨が或る時不和になつて戦争をはじめましたが双方とも水花  
 を散らして戦つて居ますと鯨魚が波浪の間から頭を出して「双方共、私  
 を仲人に頼んだなら程好く仲裁をして遣るがなア」と言つたのを海  
 豚が小耳に挿み我々の紛議に汝が立入るやうなことをするくらゐな  
 ら鯨と引組で討死をした方が勝だ哩  
 分限を辨へぬと間々耻をかく事があります

◎第三百三十三譚 驢馬と蛙

或る驢馬が材木を脊負て小さな水溜に來て其中を歩行て居ますと如  
 何した機會か立脚地を失つて水の中へ倒れ大きな荷物を脊負つてお  
 るものですから起きられないで困つて居ましたスルト其近邊に住で  
 居る蛙共が之を見て「驢馬さん汝は眞の水の中へ轉んだと云ふまで



の事じやアないか其れに左様大騒動を遣るやうでハ若私共のやうに  
始終此の中に住で居たならマア死んで仕舞ふだらう  
人は大きな不幸を堪へても僅少な悲みに堪へないことが度々で  
ざいます

◎第三百三十四譚

捕鳥奴と蝮蛇

或る捕鳥奴が籬竿を提げて捕れさうな鳥は探して居ますと或る樹に  
小鳥が囀つてゐるゆゑ此奴占めた籬竿を手鹽に延餘念もなく小  
鳥に目を着け徐々近寄りますと足元に居た蝮蛇の頭を踏みまゝたから  
蝮蛇は驚きイキナリ足を刺したから堪りません捕鳥奴は悶絶ながら  
歎息して「ア、吾ハ小鳥の命を奪ふと思つて此方の一命投ねばなら  
ぬ

小さな利益に暗らむと大きな害を受けることがありますから物

事は能く勘辨をつけねばなりません

◎第三百三十五譚

黒奴

或る人が一人の黒奴を買入れ友人にむかひ「斯なに黒いのは如何  
に譯だらう」と尋ねますと友人が「ウン是れか是れは前の主人が情な  
しに使つたからサ」と答へまゝたソコ其人ハ其黒奴を我家へ連歸  
り眞裸よして毛拂や石鹼や砂や種々の洗濯具を持出して摩擦たり洗  
たりして見ても皮膚はますます眞黒になつて少くも驗はなく黒奴は  
長い間水に漬られた爲め風邪をひるて床に就きまゝた  
骨に生たものは肉よ着きます

◎第三百三十六譚

鳶と白鳥

鳶と白鳥は美しい歌を謡ふので特許を得て居ましたか或る時馬の嘶  
くのを聞て如何した感覺の間違い己かれも彼の鳴法を學ねて見度と



頻りに練習を志して居る中肝腎の自分の歌は忘れまゝた

未來の利益のみ想像してゐるものは動もすると現在の幸福まで失ひます

◎第三百三十七譚

狼と獅子

或る狼が山の上に吼へて居ますと西陽よなつて自分の影が大層大きく見えまゝた、そこで自分が考へますに「吾は斯様に大きな身体で長さも一エークルもありながら何故獅子が怖いのだらう全体己れは諸獸の王でなければならぬ筈だが」とズット慢心して油断をして居ますと獅子が不意に飛で来て捕殺しまゝた其時狼は後悔をして「己れは何故如斯愚痴だらう益にもたゝぬ事を思つて一命を果すことよなつた

◎第三百三十八譚

膨脹た狐

二三日も食物にありつかないで居た狐が牧羊者が樺樹の洞穴に隠して置いた蒸餅と牛肉とを不圖見付け出し其洞穴へ這込んでムシヤク食ますと餘り食過ぎ腹が膨脹れて洞穴から出られなくなりグウグウ呻吟ひて居ますと其處を通りかゝつた友狐が聲を聞き付け「ナイ汝は其中に何を志して居るんだ」と尋ねます」と洞穴の中から斯くくの次第だと言ひまゝた友狐ハ「ア、左様云ふ理か其なら汝の腹鹽梅が丁度其洞穴へ這入る時分と同じやうになつたら出られるから其處で待つとのサ

◎第三百三十九譚

鵠と鵝鳥

或人が鳥屋の前を通りかゝり鵠と鵝鳥の居るのを見て此二羽で幾許價だと尋ねますと幾許々々と答へまゝた即今入用の品でもないが價直が廉いから買ませうと價金を拂ひ家へ持歸りまゝた鵝鳥は不意に



客人のあつたとき料理の手當として置き鶉鳥は綺麗な鳥だから観物の爲めにと庭の鳥檻に入れて置きまゝたがサテ或夜客人があつたので料理人に鶉鳥で一酌の準備をせよと吩咐ますと料理人の畏まり鳥檻のある處へ往て見ますと眞闇で分りませんから大概是だらうと手探りで鳥を引出し縊殺やうとすると苦まぎれよ一聲高く鳴たので料理人は「ホイコレは間違へた鶉鳥ではなくつて鶉鳥だつた

◎第四百十譚

梟と鳥蝨

梟は夜間喰物を探しに出ますゆゑ晝間はゆつくり寝て置かねばなりませんが或る處に住む梟は鳥蝨が一日やかましく鳴ので落着て眠る事が出来ませんソコで鳥蝨に向ひ少し静かにして呉れと頼みまゝたが中々承知せず以前よりは聲高に鳴たてますので梟は腹を立て彼奴は吾を馬鹿にして居るのだナ何か手術を設けて彼奴めを喰殺して

遣り度ものと考へ或日鳥蝨に向ひ「お前さんのお聲は如何にも琴の音を聞くやうで面白つて寝られません先日或所から貰つた甘露を呑みながらお前さんの琴の音を聞たいと思ひますお前さんも甘露が御好から呈上ますから何卒御入來を願ひます」と言へば鳥蝨を何よりの好物ではあり殊に聲を響められた嬉さに早々梟の住居へ行きますと梟は突然鳥蝨を捕へて喰殺しまゝた

慾心が起ると前後の思慮がなくなります

◎第四百十一譚

兇殺人

或る惡漢が人を殺しまゝたゆゑ其同胞親屬のもの等が追掛けますと命からかく逃げのびて或る大河の邊へ行きますと前途あら大きな獅子が遣て来て一口に食はうと致します進退谷まッて何志やうかどあたりを見廻しますと大樹があるので忽に其樹へ上りますと其枝には



大蛇が絡つて居て是も一呑に吞まうとして居ます是ではならぬと又たく何中へザンブと飛込みますと其處に居た鱈が得たりと一噬に噬み殺しました

人を殺すやうな大罪人は天にも地にも居る所へございませぬ

◎第四百十二譚 農夫と獅子

或る獅子が農夫の庭園へ飛び込みますと農夫の其獅子を捕らうとして門を鎖閉して仕舞ひました、すると獅子は出るには出られず焼腹を立て立まして其處に飼てある羊二三疋を捕殺し又た飼牛にも取てかゝらうとするゆゑ農夫は是で我身も危険と忽ち怖氣だち直ぐと門を開けますと獅子は一散に逃出しました、スルト農夫は獅子に捕殺された羊のことを大層残念がつて居ますと最初から此騒擾を見て居た女房が「良人の遠くてさへ獅子を見ると恐ろがッて逃げてお出のく

せに其獸を捕へやうなど、は狂人の沙汰ではありませぬか

◎第四百十三譚 大陽を訴へる蛙

或る時大陽が妻君を迎へらるゝとの評判を或る蛙が聞て空天に向て大聲をあげ何やら訴へる様子ゆゑ「ジュピター」(神名)が出現まゝく蛙に向ひ「其方は何か願ひごとでもあるか常になき大聲を立てるな」と問ひ給ふと蛙は「ハイ、申上ます此頃の評判に大陽が細君を迎へらるゝとのことでございます然るに是迄で御獨身の時でさへ我々が住居をいたします沼などを乾くあげて我々の一命に拘はるやうな事をなされた事が度々でございますに又た此上細君をお迎へなされてお見達でも出来ましたら我々どもは此後如何なめに遭ふか其れが案じられてなりません

◎第四百十四譚 人と獅子の争



或る人が獅子と連立て旅行を志すが互ひに力自慢をはじめ獅子より人が強いナニ人より獅子が強いと双方言募て居たところ路傍に勇者が獅子を踏へてゐる石像の立てあるのを見て「コレ此通りだ是れより汝の方が強いと云ふなら何ぞ其証據を出さなければならぬ」と人が勝つた心算で居ると獅子は「へ、ん夫は手前勝手の論だ是れは誰れが造へたのだお前方の同類だらう若し獅子が斯な石像を造へることを知て居たら人が獅子に踏み付けられて居るところを拵へて見せるだらう

愚論でも通用するのは名論の出るまで、ございます

◎ 第四百十五譚 神佛の議論

古典に依ると初めて人を造つたは歳徳神、家を造らへは才智菩薩牛を造つたは海王權現ぞと書てありますそこで此神佛等或る所に會

合し給ひ各々我が製作を自慢して議論中々烈くなり到底諧謔尊者に其判断を任せんととの相談調ひ其事を尊者に言ひ込みますと尊者は忽ち裁判官の地位に立ち先づ牛を指して曰く「是れあるは海王權現の製作ならんか其角の位置は眼の上において敵を突く時見ること能はず故に其製作宜しからず」と次に人を指して曰く「是れ歳徳神の製作と見受たり身体の外面に心を作らざりしを以て是れは邪人なりとて避け是れは善人なりとて近くことを得るの便利を缺けり故に此製作も完全なりと云ふべからず」と次に家をさして曰く「是れ才智菩薩の製作なるべし此家に鐵製の車なきは遺憾なり何故なれば若し近隣に悪人などの住居することあるも我家を他へ轉ずること能はざればなり」との裁判でござりましたソコで歳徳神は大に怒り給ひ「尊者よ汝は實に嫉妬の深き奴なり己れ完全なる一物をも造らずして我々が裁



断を委任したるを僥倖に只だ我々の製造にかゝる短所のみを擧げて  
批判するとの不届千萬であると云ひさま忽ち尊者を裁判官の位地よ  
り引おろし「ナリンピュス」山より追出給へり

◎第四百十六譚

農夫と鶴

或る農夫が新に田へ種を蒔きつけ鶴が喰あらすのを氣遣ひ尻を仕掛  
けて置きますと果して鶴が方々あら下りて来て忽ち其尻にかゝりま  
した、そこで農夫が其鶴を一羽づゝ捕へますと其中に鶴が一羽居て  
其足には傷が付て居ながら哀はれた聲を出して「旦那さん何卒私は  
お助け下さいまゝ」コレ此通り私は足にも怪我をした位でございませ  
何卒お慈悲を願ひます私は鶴とは違ひまして眞に氣質のよい鶴で  
ございませ私に父にも母にも孝行なものでございませ此羽根を御覽な  
さつても解ります全く鶴ではございません」と色々と歎きますと農

夫は笑ひながら「成程汝の言ふ通りぢや鶴でないことは能く解て居  
る、志かく汝は鶴と云ふ盗賊と一緒に捕られたからは其死ぬ仲間  
も入らねばならぬ

◎第四百十七譚

赤禿頭の武士

或る人老年で頭の髪がなくなり赤禿頭となつたゆゑ常も假髪を付  
て居ましたか或日二三の友人と馬に乗て狩に出かけ痛く馬を走らせ  
ますと折ふし風が吹て其假髪を吹飛ばし元の赤禿頭となりました其  
處で友人が笑ひ出すと赤禿翁も可笑かりて「生れた時から生へて居  
た髪でさへ頭に居ないやうになつたもの假髪が此頭に辛包しては居  
られないも無理はないのサ

◎第四百十八譚

狼と羊仔

或る羊仔が羊舎へ歸る路を迷つてうろくして居ますと或る狼が之



を見付け「彼奴を捕殺して遣りたいものだが夫れにしても手荒なことをせず何か道理をつけた方が宜いと考へノサ〜羊仔の傍へ行き「ナイ先生愚弄の意」汝は去年余を侮辱たことがあるが其れを覺へて居るか」と言ひますと羊仔は面色を變へ「汝は何を言いなさるぞ私は今年生れたのだから去年汝を侮辱たことはない」と答へますと狼は又た汝は日外余の井戸へ来て水を飲んだことがあるだらう」と言ひますと羊仔は「否々私は阿母の乳を水や食物の代りにして未だ水を飲んだことはありませんと井戸などは覗いたこともありません」と答へますと狼は面倒臭いといふ氣色をして「汝は余の言ふことを彼是れと辯解をするが余は腹が減て仕方がないから如何しても汝を逃しては置かれまい」と言ひながら忽ち羊仔を捕へ遂々食殺志て志まひました

第四百十八譚



狼と羊仔

第四百十九譚



狼と家犬

第四百五十譚



負傷の狼

第四百五十一譚



獅子と狐使役る

第四百五十二譚



獅子と牡猪子



此画は本書中の一譚内にて共有様を寫し出したるものにして右側に番号を付けし通讀の時參觀の便を圖りしものなり



◎ 第四百四十九譚

狼と家犬

或る狼が能く肥て居る家犬に出會ひ其頸輪から長い鎖で大きな木片を附けて居ますのを見て「コレ犬さん汝は大層食物が要るだらうが其れを構はずに汝を養つて居るのは誰れだエ又た其様重ひ物を引摺らして居るのも到底其飼主だらう」と問ひますと家犬は「私の主人サ其外に私を養つたり如斯物を引摺す人はあいワ」と答へますと狼は汝の主人は奇異い人だなア私等の友狼には汝の主人見たやうな馬鹿なことをするものはないぜ能く考へて見なされ其様重い鎖や木片を附けて居ると幾許食へても腹が飢りどほくだから

眼糞が鼻糞を笑うと同じ事です

◎ 第五百十譚

負傷の狼

或る狼が暴犬に噛まれて傷を負け身軀が自由になりませんので小山



の端に臥て居るところへ一頭の羊が通りかゝりまゝたゆま狼は「是所から少く離れた所に流れがあるから何卒水を持って来ては呉れまいか左様して下されば食物は私が自分で都合します」と言ひますと羊は中々油断せず「なる程其負傷では嘸お困却でせう併し私が水を持って来て上るとお前が自分で都合すると云ふ食物は私の身體でいありませんか

外見を饒ツた話説は直に其心が分ります

◎第百五十一譚 獅子に使役れる狐

或る狐が獅子にむかひ「私は餌食になる獣を見付ますから汝は其をお捕なさい爾して交情を好く暮しますとお互の爲めですから何卒宜敷お願い申ますと言いますと獅子も成程それは双方の爲めだと思ひ忽ち相談が極り其後狐は餌食となる獣を見出すを自分の職分と獅子

は其を捕るのを職分にして居ましたか不圖狐は慢心を起して獅子に向ひ「私は餌食を見付けるのが職分ですが私だつて何も夫が捕れぬいといふ譯はありません私も明日からは自分で餌食になる獣を捕て見ませう」と断はりましてサテ其翌日の朝早々一頭で狩に出ますとたちまち獵犬に邂逅ひ逃げやうとする間に早や獵夫に銃撃れて自分が人の餌食になりました

◎第百五十二譚 獅子と牡猪子

夏の炎天になりますと動物は何によらず咽喉が渴いて来るものでございませが獅子も咽喉が渴いて堪りませんから水を飲まんと或る井戸へ來ますと牡猪子も其處へまゐりまして余が先だイヤ余だと口論をはじめ果は大喧嘩となり必死となつて嚙合つて居りましたが其中に双方とも疲労が來て一時合引になつて其處へ倒れんと鴉が此の戦



ひを見て居て若く孰か殺されたら直ぐに御馳走にありつくこと云ふ様  
子で待て居ますソコデ獅子にも牡猪子もツマラヌ喧嘩だと心づき一  
何んど相互の戦争は止めにして交情好く志やうではないか若く嚙合  
て死んで見なさいアノ鴉めの餌食になるに違ひないぜ

家庭教育 幼年修身はなし 終

明治廿四年十二月五日出版  
明治廿四年十二月七日印刷

賞金九銭

版權登録

版權所有

著作者 渡邊松茂  
大阪市北區中之島貳丁目六十五番屋敷

發行者 香川一秀  
大阪市東區安土町四丁目三十八番屋敷  
寄留

印刷者 石田源太郎  
大阪市東區安土町四丁目

專賣者 積善館  
福岡縣福岡市博多中島町

專賣者 積善館支店

幼 年 脩 身 身 是 ち し



松本謙堂著

# 教育勅語唱歌

全壹冊

實價金貳 錢

郵税金四 錢

本編ハ明治二十三年十月三十日を以て忝くも我 天皇陛下より下し給ひたる教育の淵源たる勅語を唱歌と爲したるものにして我國の人民の貴賤を論ぜず捧唱せざる可らざるハ論を俟たず學童諸君に尤とも必用なる唱歌なり

高等中學校教諭文學士前川龜次郎君序  
伊 良 子 晴 洲 先 生 編 輯

日用文 記事 記遊 記戰 祝詞 論 說 志傳

全 貳 冊

實價金六拾錢

郵税金貳拾貳錢

高等科模範  
作文法詳解

# 明治作文三千題

序 書後 題 跋 贊 辨 碑銘 和文

本書ハ務メテ作文ノ原則ヲ明晰ニシ規矩ヲ指示シタル者ニシテ先ツ日用書翰文ノ大意ヨリ各種文体ノ解。標記及圈点ノ用法。文法解釋。類話及助字解等ヲ掲ケ加フルニ四時ノ記遊文

ヨリ各文章ノ作例四季ノ日用文及通常日用文ノ作例ヲ輯載シ而シテ和歌。和文。軍歌ノ如キニ至ルマテ之ヲ掲ゲ且傍訓ヲ加ヘタルモノナレバ何人ト雖一讀ノ下ニ其意味ヲ解シ得ラル、ノミナラズ各体作文ノ秘訣ヲモ知了シ實地應用ニ適スルヲ蓋シ此書ニ踰越スル者ハアラザルベシ乞フ大方ノ諸彦ヨ一本ヲ購讀シ以テ此稟告ノ誣妄ニアラザルヲ知リ玉ハンヲ

## 教育全書目錄

松本謙堂著

家庭教育はな一

全 一 冊

郵税金九 錢

家庭修身はな一

全 一 冊

郵税金九 錢

渡邊松茂著

小學修身はな一

全 一 冊

郵税金九 錢

家庭幼年修身はな一

全 一 冊

郵税金九 錢

本書は德育智育躰育に關する種々の談話を讀み易く解し易く綴り且つ卷中に密書を挿みたるものにして洵とに學術の博覽會教育の花園と謂ふ可し故に一度之を讀むときと修身の指南車開智の羅針盤育養の藥石となり實に家庭教育の良書籍なり



松本謙堂著

家庭小學生徒演說

全一冊

實價金拾 錢

郵税金四 錢

本書は百科學術の要を網羅し平易簡潔を旨とし目今社會に流行する演說体の口調を以て最も面白く最も勇しく恰も真正の演說を傍聽するが如き有様に綴りたるものにして實に學術上の寫眞鏡家庭の良教師なり

松本謙堂著

家庭日本歴史ばかり

全一冊

實價金拾 錢

郵税金四 錢

本書は遠く神代の時に起り明治二十三年國會開設の時に了る其間の政治、宗教、戰亂、文學、工藝、外交、通商、風俗の沿革事物の起原等の事項を談話体の文に綴り何人にも讀み易く解し易く且つ必要なる圖畫を挿みたるものにして實に明治の教育を受くる童男童女の必讀を要す可き良書なり

松本謙堂著

家庭支那歴史ばかり

全一冊

近刻

家庭萬國歴史ばかり

全五冊

近刻

松本謙堂編

試験日本小歴史

全一冊

實價金廿五 錢

郵税金八 錢

今や日本歴史の發刊前後續々として踵を接し一雨一晴春草の地を抜くが如しと雖ども繁簡其宜きを得たるもの殆ど稀あり然るに弊館に於て發刊せし所の本史は我邦神人無別の太古に筆を起し明治昭代の今日に筆を止め是を上古、中古、近古、近代、の四編に別ち以て國勢の變遷古今の沿革を明にし加之のみならず巻尾に續史の一編を設け官制、文學、兵事、法律、貨幣、度量衡、曆法、農事、商業、金石、土木、織縫、醫術、書畫、諸工業、博覽會及び教法、宗派等百般必要の事項を簡約明晰に叙述し尙且つ諸官私立各學校に於て歴史科應試の用に供せんが爲め神世より以下每章に一々試験問題を掲出し答案を起すに便ならしめしが如き洵に鐵中の錚々たるものと謂ふ可し

渡邊松茂著

試験萬國小歴史

全一冊

實價金拾五 錢

郵税金六 錢

萬國古今の歴史を知るは外交頻繁の今日に於て尤も必要あるものなり抑も本書は萬國上古史より近代史を包羅し列國の興亡盛衰風俗の沿革學術宗教の隆替變遷等を頗る簡明に記述



し且つ受験に應用せしめんが爲め設問起案の体と爲したるものにして學生諸君の須らく誦讀すべき好歴史あり  
積善館編纂

試験 日本小地誌

全一冊

實價金貳拾錢  
郵税金六錢

現社會に於て地理學の尤も必要あるの今復た嗚々するを俟たず矧や學生諸君に於ての一日も忽諸に付す可らざるをや此書専ら諸官私立學校に於ける地理科應試の用に充んが爲め學科課程に配して編述せるものあれば其便益豈に鮮少ならんや然り而して繁簡其宜きを得たれば一般人士の地理學を講究するに尤も適切なり

渡邊松茂著

試験 萬國小地誌

全一冊

實價金拾五錢  
郵税金六錢

學問の智識を開達するに在り智識を開達するの字内萬國の地理を熟察するに在りとい今日學者社會の定説あり此書一小冊子なりと雖ども字内萬國の地理を簡明に叙述して遺す所なく故に地理を熟察して智識を開達するの蓋し此書に伍するの書なし加ふるに一々問題を設けて以て試験場裏の應答をして自在ならしめたるが如きの學生諸君に層一層の裨益を與ふるや蓋し疑を容れざるあり

日本歴史試験答案	全一冊	近刊
日本地理試験答案	全一冊	近刊
萬國歴史試験答案	全一冊	近刊
萬國地理試験答案	全一冊	以下同上
物理學試験答案	全一冊	
化學試験答案	全一冊	
植物學試験答案	全一冊	
動物學試験答案	全一冊	
礦物學試験答案	全一冊	
經濟學試験答案	全一冊	
算術三千題試験答案	全一冊	



珠算三千題試驗答案

全一冊

必學童 日本地圖

全一冊

必學童 萬國地圖

全一冊

石版 新訂日本地圖

全一冊

密畫 新訂萬國地圖

全一冊

試驗 小化學

全一冊

試驗 小物理學

全一冊

試驗 小動物學

全一冊

試驗 小植物學

全一冊

試驗 小鑛物學

全一冊

試驗 小經濟學

全一冊

文學士杉江輔人先生纂著

增訂新デスク辭書

●西洋綴總クロース仕立金文字入全壹冊  
紙數六百六十ページ 實價金貳拾貳錢  
郵税金四錢

本書ハ明治昭代ニ著名ナル杉江先生ノ纂譯セラレタルモノニシテ汎ク泰西ノ諸字典ヲ參酌シ以テ其ノ萃ヲ拔キ其ノ秀ヲ採リ而シテ其ノ譯語ノ妥當明確詳密ニシテ煩繁ナラス能ク其ノ中ヲ得タリ加フニ卷末ニ方テ各種ノ圖畫ヲ挿入シ學者ヲシテ一目ノ下ニ其定義ト形狀トヲ詳悉スルコトヲ得是レ洵ニ文壇上一日モ欠ク可カラサル珍書ナリト謂フ可シ

文學士杉江輔人先生纂著

增訂新デスク辭書

●西洋綴總クロース仕立全壹冊  
紙數八百五拾ページ 實價金三拾五錢  
郵税金四錢

本書ハ有名ナル杉江先生カ多年官私立學校ニ在テ生徒ニ英語作文ノ科ヲ教授セラレ、ノ際纂著セラレシモノニシテ即チ日本語ヲ以テ英語ヲ索引スルニ至便ナルコト夫ノ「ヘボン」氏ノ辭書モ亦タ恐ラクハ三舍ヲ避クベシ抑モ「ヘボン」氏著ノ辭書ノ如キハ頗ル浩瀚ニ過キ輕便ニ失スト雖氏本書ハ掌中ノ辭書ニシテ語數モ亦タ「ヘボン」氏ノ辭書ニ讓ラズ實ニ學海ノ寶玉ト謂フモ敢テ誇言ニ非ルナリ



工卜2Y-85





